

## 張伯英『法帖提要』訓注稿(7)

澤田雅弘、澤岡雪子、池田絵理香、西原 歩、鄭 緯  
安藤喜紀、山下敬起、船田聖也、張 宇寧、郭 梓瑩

大学院書道学専攻博士課程前期課程の開設授業「中国書学演習」(澤田担当)のテキストとした張伯英『法帖提要』(筆写原稿。『統修四庫全書総目提要』所収)の内23項目を訓読し注を付したものである。原稿は、受講者それぞれが担当項目を整え、注を付したが、訓読については澤田が点検した。執筆者名は、各項末の( )内に記した。なお、原稿の取りまとめには、安藤が当たった。(澤田)

### 【No.144】

劉文清墨刻三卷<sup>1</sup>

清劉墉書。為載之<sup>2</sup>臨古一卷。千字文百家姓各一卷。百家姓有吳錫麒<sup>3</sup>跋。刻之端硯上者。共十二方。千文書於金陵。未具年月。三種乃集成本。非一時之刻。首卷臨古為尤佳。小字淵穆渾厚。無浮筋露骨之病。文清晚年書。每數行輒易其文。何子貞謂<sup>4</sup>為愛惜精力不得不爾。若連篇累牘之作。多在中年以前。此臨古各系以跋。識解超卓。非深於書者不能到。亦有隨意書數語。無闕宏旨。宜分別觀之。臨画讚云。米海岳臨此書。自記唐人臨右軍<sup>5</sup>。雖戲言亦非無意。謂三希堂之唐臨画讚<sup>6</sup>也。其米跋一行實偽迹。小楷亦非米作。文清所評殊失鑑也。臨表忠觀碑云。吳原博陳仲醇之學東坡。沈石田之學山谷。真為古人詬病。文清甚不滿意於匏庵。其題蘇書會云。吳匏庵學坡書。直是毫沒交涉。夫匏庵於蘇。步趨惟謹。不能超然象外。然亦具渾厚之致。明人為蘇書無能加其上。茲與陳仲醇沈石田一例薄之。二家豈能望匏庵。斯言過矣。此卷書佳而刻亦善。遠勝錢梅溪所摹之清愛堂帖<sup>7</sup>。後二刻雖亦工緻。非其倫也。

清の劉墉(1720~1804)の書。載之の爲にしたる臨古一卷。千字文、百家姓 各一卷。百家姓に吳錫麒の跋有り。之を端硯上に刻せし者にして、共に十二方。千文は金陵に書す。未だ年月を具せず。三種は乃ち集成本にして、一時の刻に非ず。首卷の臨古は尤も佳と爲す。小字は淵穆渾厚にして、浮筋露骨の病無し。文清(劉墉)の晩年の書は、數行毎に輒ち其の文を易う。何子貞(紹基 1799~1873)謂う、「精力を愛惜するが爲に爾せざるを得ず。連篇累牘の作の若きは、多く中年以前に在り。」と。此の臨古は各おの系くるに跋を以てし、識解超卓。書に深き者に非ずんば到る能わず。亦た随意に數語を書し、宏旨に関かる無きもの有り。宜しく分別して之を觀るべし。臨画讚に云う、「米海岳(芾)此の書を臨して、自ら唐人 右軍を臨すと記すは、戲言と雖も亦た意無きに非ず。三希堂の唐臨画讚を謂うなり。其の米跋の一行は實は偽迹。小楷も亦た米作に非ず。文清の評する所は殊に鑑を失するなり。臨表忠觀碑に云う、「吳原博(寬 1436~1504)、陳仲醇(繼儒 1558~1639)の東坡(蘇軾)を學ぶ、沈石田(周 1427~1509)の山谷(黃庭堅)を學ぶは、真に古人の詬病と爲す。」と。文清甚だ意を匏庵に満たさず。其の題蘇書に會て云う、「吳匏庵(寬)は坡書を學ぶも、直だ是れ毫も交涉沒し。」と。夫れ匏庵の蘇に於けるは、步趨惟だ謹のみにして、象外に超然なる能わず。然れども亦た渾厚の致を具う。明人は蘇書を爲して能く其の上に加うる無し。茲に陳仲醇、沈石田と例を一にして之を薄んずるも、二家豈に能く匏庵を望まん。斯の言は過りなり。此の卷は書佳くして刻も亦た善し。遠く錢梅溪(泳)の摹する所の清愛堂帖に勝る。後の二刻は亦た工緻と雖も、其の倫に非ざるなり。

[注]

- 1 劉文清墨刻三卷：『叢帖目 3』『四部叢錄芸術編』未収。張其鳳『清代諸城劉氏家族文化研究』（2013、中華書局）にも言及がない。
- 2 載之：不詳。張其鳳『清代諸城劉氏家族文化研究』にも見えない。
- 3 吳錫麒跋：吳錫麒（1746～1818）は字は聖徵、号は穀人、錢塘の人。乾隆40年（1775）の進士。官は国子監祭酒に至った。跋はその『正味齋駢体文』24卷『同 駢体文統集』8卷に未収。
- 4 何子貞謂：未検。
- 5 唐人臨右軍：「唐人東方朔画像賛」（注6参照）の米芾跋。
- 6 三希堂之唐臨画讚：『三希堂石渠宝笈法帖』第5冊「唐人東方朔画像賛」。
- 7 清愛堂帖：嘉慶10年（1805）、劉墉の姪の劉鏗之の奉聖旨摹勒、錢泳の鐫刻。『叢帖目 3』参照。

（澤田雅弘）

【No145】草書孝經一卷 金陵刻本

清耆英<sup>1</sup>書。道光壬寅勒石。耆英字介春。曾重摹澄清堂帖<sup>2</sup>。此為江寧將軍時。書貽耕生和尚<sup>3</sup>者。介春藏帖最富。有右軍草書孝經<sup>4</sup>唐刻。其欠佚處虞褚諸公以正書補之<sup>5</sup>。茲為耕生臨寫。跋者塔芬布<sup>6</sup> 輔元 王賡<sup>7</sup>牛鑑<sup>8</sup>包世臣 湯貽芬。包跋云<sup>9</sup>。芸事以書為至難、書道以草書為至難。蓋意屬使轉則易滑。心存点画則易滯。二弊交攻。是以能免斯累。代不數人。右軍草書帖皆束札。其連篇類牘者。惟聞孝經有唐刻。而流傳世間。竟無二本。介春將軍重購得之。將軍潛心此道三十余年。既得此本。所謂黃鶴樓頂親聽仙人吹玉簫<sup>10</sup>也。茲為耕生長老臨寫一過。滑滯二弊。俱無所犯。則以轉腕換筆精熟過人故耳。米老云<sup>11</sup>每對真迹。令人氣攝。予今日之謂矣。湯雨生亦極稱讚。而書實平々。略無古意。滑滯處尤所不免。為顯者題書不無違心之論。故安吳論書中亦不載此跋。至右軍孝經之真偽。不見原搨。不容懸斷。何前賢竟無道及之者。果為真迹。斯亦奇矣。

清の耆英の書。道光壬寅（22年 1842）の勒石。耆英は字は介春。曾て澄清堂帖を重摹す。此れは江寧將軍為りし時、書して耕生和尚に貽る者。介春は藏帖最も富み、右軍の草書孝經の唐刻有り。其の欠佚の處は虞（世南）、褚（遂良）の諸公 正書を以て之を補う。茲に耕生の為に臨寫す。跋する者は塔芬布、輔元、王賡、牛鑑、包世臣（1775～1855）、湯貽芬（芬は汾の誤記。1778～1853）。包跋に云う、「芸事は書を以て至難と為し、書道は草書を以て至難と為す。蓋し意 使轉に属せば則し滑り易く、心 点画に存せば則ち滯り易く、二弊交ごも攻む。是を以て能く斯の累を免かるは、代よ人を数えず。右軍の草書帖は皆な束札。其の連篇類牘は、惟だ孝經のみ唐刻有りて、世間に流傳すと聞くと、竟に二本無し。介春將軍重く購いて之を得。將軍 心を此の道に潜むこと三十余年、既に此の本を得。所謂 黃鶴樓頂親しく仙人の玉簫を吹くを聴くなり。茲に耕生長老の為に臨寫一過す。滑滯の二弊、俱に犯す所無し。則ち轉腕換筆の精熟 人に過ぐるを以ての故のみ。米老云う、『真迹に対する毎に、人をして氣攝れしむ。』とは、予の今日の謂なり。」と。湯雨生（貽汾）も亦た稱讚を極む。而れども書は實に平々にして、略は古意無く、滑滯の處は尤も免かれざる所なり。顯者の為の題書は心に違ふの論無くんばならず。故に安吳論書中にも亦た此の跋を載せず。右軍の孝經の真偽に至りては、原搨を見ざれば、容に懸斷すべからず。何ぞ前賢 竟に之に道い及ぶ者無からん。果して真迹為れば、斯れ亦た奇なり。

[注]

- 1 耆英：？～1858。愛新覺羅氏。滿州正藍旗の人。アヘン戦争の際に和平交渉にあたり、道光22年（1842）清国全權として南京条約を締結。道光24年（1844）両広総督に就任。アロー戦争の際、対英交渉の責任を問われ自刃を命ぜられる。
- 2 重摹澄清堂帖：『法帖提要』No385「真草蘭亭帖一卷」（耆英書）に、「為兩広総督時（1844年3月19日～48年7月4日）、曾重摹澄清堂帖。…耆所摹澄清堂帖三卷、以端石刻於廣州、運歸京師、而搨本特少、石已不詳所

- 在。」という。また『肅府本淳化閣帖』（翁覃谿校勘本）第四卷卷尾の耆英跋に「庚戌冬小窓無事、檢閱所藏各種旧搨並督粵時手摸澄清堂帖寿之貞珉。其石已鑲於成趣園之秋靜軒壁。…道光庚戌（30年 1850）冬、介老時年六十有四、漫記。」と見える。なお、No.385「真草蘭亭帖一卷」に続けて「某氏得其一、謂是南唐祖刻初搨、自署帖祖樓、以道光時刻搨之帖而稱帖祖、可謂謬妄之極。市中有影印者、裝潢精美、猶索重直、閱之令人失笑。」とある某氏は梁啓超。羅振玉舶載し博文堂が影印したもの（大西帖祖齋藏本）も耆英重摹本とされる（宇野雪村『法帖事典』301頁参照）。
- 3 耕生和尚：六朝以来の古刹妙相庵の僧。沈兆澐（1786～1877また78）『織簾書屋詩鈔』卷5「遊妙相庵」第2首の「高僧重師誼、配食水仙王。」の注に「僧耕生記其業師於祠中。」と見える。この水仙王祠が屈原祠であることは、湯貽汾（1778～1853）の『琴隱園詩集』卷23に「秋日過屈子祠、贈主僧耕生、兼懷包慎伯大令」詩があることから知られる。
- 4 右軍草書孝經：永理『詒晉齋集』（道光28年刻本）卷8「唐補右軍孝經跋」に「前有貞觀敕。曰、朕閱孝經、有闕風化、王羲之草書、尤堪珍玩、惜乎殘欠、卿等各補一章、勒之琬、以詔萬祀。貞觀二年六月廿五日敕。自「開宗明義章」至「敬親者」右軍書。欠「膚」字。自「不敢慢於人」至「如履薄冰」真書補、不著某臣名。自「卿大夫章」至「以事其先君」右軍書。「非先王之法服不敢服」二服字缺、「以事其先君」下亦欠、無補。自「教愛」至「謂之」右軍書。自「悖礼」至「其儀不忒」真書補、不著某臣名。自「紀孝行章」至「為下而」真書補、著臣魏徵。自「亂則刑」至「又焉得為孝乎」右軍書。自「応感章」至「無思不服」真書補、著臣虞世南。自「事君章」至「何日忘之」真書補、著臣褚遂良。自「喪親章」至「孝子之事親終矣」真書補、著臣薛稷。貞觀敕有御書之寶、開宗明義章有右將軍會稽内史印。右軍書「民」字不欠筆。唐臣補書「民」字欠末筆、虞世南「世」字欠末筆。此帖紙墨之旧、筆鋒毫鈇之備尽。蓋即貞觀祖搨也。」と見える。
- 5 虞褚諸公以正書補之：「右軍草書孝經」の注、参照。
- 6 塔芬布：梁廷楠『夷氛聞記』卷4に、耆英が遣わした「佐領塔芬布」が、道光22年（1842）鎮江を落とした英国艦隊の船中で交渉に当たった記事がみえ、『清史稿』卷389柏蔭伝の咸豊三年云々には「協領塔芬布」（協領は正三品。位は副都統の下、佐領の上）と見える。
- 7 輔元、王賡：ともに不詳。
- 8 牛鑑：1785～1858。字は鏡堂、甘肅武威人。嘉慶19年（1814）進士。官は河南巡撫、兩江総督などを歴任。
- 9 包跋云：後述に「安吳論書中亦不載此跋」とある。『安吳論書』以外にも未検。なお注3所掲の湯貽汾『琴隱園詩集』卷30「耆介春宮保初度日、同人集妙相庵、瞻公行看子（行看子は行樂図）、懷五章」詩には湯貽汾・耆英と妙相庵の關係、またこの五章に次いで収録される「秋林詩思図、為楊碩卿鐸。題時同包慎伯大令・毛李海瀚刺史・顔咏之上舍、集妙相庵、季海將還揚州。」詩には湯貽汾・包世臣と妙相庵の關係が認められる。
- 10 黄鶴樓頂親聽仙人吹玉簫：「昔費文禕登仙、每乘黄鶴於此樓憩駕、故号為黄鶴樓。」（『太平寰宇記』鄂州・江夏県）の伝承がある黄鶴樓を詠じた李白の七言絶句「与史郎中欽聽黄鶴樓上吹笛」に「一為遷客去長沙、西望長安不見家。黄鶴樓中吹玉笛、五月落梅花。」と見える。
- 11 米老云：『書史』の「唐荆処黄楮紙伯高千文兩幅、与刁約家兩幅一同、[是暮年真迹]、每弁六七字、刁氏者後有李玉徐鉉跋、為人偽刻建業文房之印、印之連合縫印破字、[每見令人歎息]。」か。

（澤田雅弘）

【No.146】

激觀閣樞古帖三卷<sup>1</sup> 南海伍氏本

清伍元蕙輯。元蕙字儷荃。有南雪齋藏真帖<sup>2</sup>已著録。南雪皆摹自墨迹。此則重摹古刻。多宋搨本之罕伝者。嘉道間粵中刻帖頗盛。筠清館<sup>3</sup>之外。大都真贋雜糅。南雪偽書較少。其鑑別視潘孔<sup>4</sup>諸家為優。此帖分卷無次第。魏

晋齐梁一卷。唐二卷。魏鍾繇。晋王虞。王羲之。王洽。齐王僧虔。梁蕭子雲。僧虔二啓。子雲書列子。均出泉州閣帖<sup>5</sup>。泉帖宋時所刻。淳熙間莊夏<sup>6</sup>已有摹本。而孫退谷<sup>7</sup>問者軒帖考謂洪武四年泉州知府常性所刻<sup>8</sup>殊誤。常刻乃積文也。泉本小楷尤精。在一切覆刻之上。但原本不易見。通行者悉明翻。無足觀耳。王潤帖包慎伯以為王凝之書<sup>9</sup>。右軍卒於升平五年。不及見大令之小女玉潤。所論甚當。黃庭比筠清摹本甚瘦。王元美董思光跋<sup>10</sup>。極為稱贊。而不見精采。重刻小楷最不易肖。其神韻更非粵中刻手可傳。尊勝呪題曰唐法帖。不曰率更書。亦有見地。劉太冲序用忠義堂本。自勝近代所傳墨迹。全帖疑不僅三卷。不拘次第。隨成隨搨。摹帖自与刻書不同。其時無影照法。伍氏藏帖既富。欲廣古刻流傳。亦以嘉惠芸林。意甚善也。

清の伍元蕙の輯。元蕙は字は儷荃、南雪斎藏真帖有り、已に著録す。南雪は皆な墨迹より摹す。此れは則ち古刻を重摹し、宋搨本の伝うること罕なる者多し。嘉（慶 1796～1820）道（光 1821～50）の間、粵中（広東省）は刻帖 頗る盛んなれども、筠清館の外は、大都 真贋雜糅す。南雪は偽書 較や少なし。其の鑑別は潘・孔の諸家に視べ優ると為す。此の帖は分卷 次第無し。魏晋齐梁は一卷、唐は二卷。魏は鍾繇（151～230）、晋は王虞（276～322）・王羲之（303～61）・王洽（322～58）、齐は王僧虔（426～85）、梁は蕭子雲（494～98）、僧虔の二啓、子雲の書する列子は、均しく泉州閣帖より出づ。泉帖は宋の時の刻する所。淳熙（1174～89）間 莊夏に已に摹本有り、而して孫退谷の【問者軒帖考】に、洪武四年（1371）泉州知府の常性の刻する所と謂うは、殊に誤る。常の刻は乃ち積文なり。泉本は小楷 尤も精、一切の覆刻の上に在り。但だ原本は見易からず、通行は悉く明翻にして、觀るに足る無きのみ。玉潤帖は包慎伯（世臣 1775～1855）以て王凝之（？～399）の書と為す。右軍は升平五年（361）に卒し、大令の小女玉潤を見るに及ばずと。論ずる所甚だ当たる。黃庭は筠清の摹本に比ぶれば甚だ瘦す。王元美（世貞 1526～90）、董思光（思白または光香の誤り。其昌 1555～1636）の跋は極めて稱贊を為すも、精采を見ず。重刻の小楷は最も肖せ易からず、其の神韻は更に粵中の刻手の伝う可きに非ず。尊勝呪の題に唐の法帖と曰い、率更の書と曰わざるは、亦た見地有り。劉太冲序は忠義堂本を用う、自ずから近代伝うる所の墨迹に勝る。全帖は疑うらくは、僅かに三卷のみならず、次第に拘わらず、隨成隨搨す、と。摹帖は自ずから刻書と同じからず、其の時 影照法無し。伍氏は藏帖既に富む。古刻流傳を広げて、亦た以て芸林に嘉惠せんと欲す。意 甚だ善し。

[注]

- 1 激觀閣撫古帖三卷：集帖。郭子堯、区遠祥、梁天錫の鐫刻。咸豐元年（1851）刻成。【叢帖目 2】激觀閣摹古帖 4 卷に「伍君儷荃……其集晋唐宋元明諸書真蹟上石者。凡十二卷。名曰南雪斎藏真帖。選刻皆精。集魏晋齐梁唐諸宋拓上石者四卷。名曰激觀閣摹古帖。尤良。」とある。
- 2 伍元蕙輯元蕙字儷荃有南雪斎藏真帖已著録：伍元蕙（1824～65）は広東省南海の人。張伯英【説帖】南雪斎藏真12卷（続修四庫提要第273項）に元蕙字葆恒、号儷荃とある。南雪斎藏真帖は集帖、咸豐2年（1852）刻成。【叢帖目 2】12卷参照。
- 3 筠清館：筠清館法帖 6 卷。吳榮光が家藏の法書を選んだ集帖、道光10年（1830）刻成。【叢帖目 2】【説帖】（続修四庫提要第255項）参照。
- 4 潘孔：潘正煒（1791～1850）。字は季彤、号は聽颿樓主人、広東省番禺の人。【聽颿樓法帖】を刻した。潘仕成（生歿年不詳）。字は德畬、広東省広州の人。【海山仙館藏真】を撰した。孔広陶（1832～90）。字は鴻昌、号は少唐。広東省南海の人。集帖に【嶽雪樓鑑真法帖】、著に【嶽雪樓書画録】がある。
- 5 泉州閣帖：淳化閣帖 翻刻本の一つ。馬蹄帖ともいう。劉次莊【法帖積文】を付刻する。
- 6 莊夏：生歿年は諸説あり。字は子礼、号は藻斎老人。淳熙8年（1181）の進士。福建省泉州の人。【宋史】卷395列伝154参照。
- 7 孫退谷：孫承沢（1592～1676）。退谷は号。山東省益都の人。明 崇禎4年（1631）の進士で、給事中に官し、清に再任して吏部左侍郎に至った。著に【庚子銷夏記】【問者軒帖考】がある。書は米芾を学んだという。

8 問者軒帖考謂洪武四年泉州知府常性所刻：『問者軒帖考』泉帖の項に「泉州知府常性。於洪武四年辛亥。刻於郡学。從閣帖祖本摹刻。」とある。

9 玉潤帖包慎伯以為王羲之書：『芸舟双楫』卷6論書2「書譜弁誤」参照。升平3～4年頃の王羲之の書簡に、王献之が未婚である旨が記されているが、その1～2年後に王羲之は厭世しているため、献之の娘玉潤を知っているはずがない、としている。

10 王元美董思光跋：未検。

(池田絵理香)

【No.147】

吏治輯要一卷<sup>1</sup>

清倭仁<sup>2</sup>書。仁字良峯。諡文端。咸同間所稱理学名臣也。子咸<sup>3</sup>。字新伯。署河南孟津県知県。良峯録官箴數十則寄之。吳鴻恩跋云<sup>4</sup>。新伯同年由令尹擢監司。歷著循声。克全大節。得力於庭訓者為多。此編良峯夫子手書。以為教忠之則。皆前賢嘉言懿行。無不深切著明。蓋吏治者天下治乱所関。使出身加民者。以此編作先路之導。吏治自必蒸蒸日上。鴻恩壬戌成進士。出大賢之門。及入翰林。每見夫子講学之余。兼談吏事。歐陽公所謂文学止於潤身。政事可以及物<sup>5</sup>。其引掖後進。依然教誨式穀之深衷也。吳云克全大節。未詳所指。清季仕途蕪雜。吏治日壞。國家之弱。未必不由於是。彼時与居官者言此。徒笑其迂闊耳。前十余則小楷書。後数十則字略大。間有行体。而無一筆懈惰。方整学顔平原。為理学家筆墨。可望而知。吳跋亦工秀。然止是翰林円熟之字。不如良峯筆力堅重。有書家矩度。題籤者高陽李鴻藻<sup>6</sup>也。

清の倭仁の書。仁は、字は良峯、諡は文端。咸同の間の稱する所の理学の名臣なり。子の咸は、字は新伯。河南孟津県の知県に署く。良峯は官箴 数十則を録し之に寄す。吳鴻恩の跋に云う、「新伯同年は令尹より監司に擢せらる。歴（ひさ）しく循声を著し、克く大節を全す。力を庭訓に得る者、多しと為す。此の編は良峯夫子の手書。以て教忠の則と為す。皆な前賢の嘉言懿行。深切著明ならざるは無し。蓋し吏治は天下の治乱の関する所。身を出して民に加うる者をして、此の編を以て先路の導と作さしめば、吏治は自ら必ず蒸蒸日上として日び上るなり。」と。鴻恩は壬戌（同治元年1862）進士と成り、大賢の門に出で、翰林に入るに及んで、毎に夫子に見えて講学するの余に、兼ねて吏事を談る。歐陽公（陽脩）の謂う所の、「文学は身を潤すに止まる。政事は以て物に及ぶべし。」と。其の後進を引掖し、依然として之を教誨式穀すること深衷なり。吳云う、「克く大節を全す」と。未だ指す所を詳にせず。清季は仕途は蕪雜にして、吏治は日に壞る。國家の弱は、未だ必ずしも是に由らざるばあらず。彼の時 官に居る者と此を言え、徒だ其の迂闊を笑うのみ。前の十余則は小楷書。後の数十則は字 略ぼ大。間ま行体有るも、而れども一筆の懈惰無し。方整は顔平原（真卿）を学び、理学家の筆墨為ること、望みて知るべし。吳跋も亦た工秀。然れども止だ是れ翰林の円熟の字なるのみ。良峯の筆力堅重にして、書家の矩度有るに如かず。題籤は高陽の李鴻藻なり。

[注]

1 吏治輯要一卷：『倭文端公遺書』卷10に見える。

2 倭仁：1804～71。字は良齋、号は良峯、烏齋格里氏、蒙古正紅旗の人。室号は賜礼堂、聽鸞山館。

3 子咸：『清史稿』卷391 列伝178に「子福咸、江蘇塩法道。署安徽徽寧池太広道。咸豊十年（1860）、殉難寧國。贈太僕寺卿、騎都尉世職。福裕、奉天府府尹。従子福潤、安徽巡撫。光緒二十六年（1900）、外国兵入京師、闔家死焉。」とあり、子の名が福咸、福裕、福潤である。「子咸」は福字を脱するか。

4 吳鴻恩：1834～？。字は澤民、号は春海、四川銅梁の人。翰林院編修に任ぜられ、山東道御史の後に山西寧武知府に至る。吳鴻恩跋云は未検。

5 文学止於潤身。政事可以及物：『宋名臣言行録』後集卷2に「公曰。不然。吾子皆時才、異日臨事、当自知

之。大抵文学止於潤身。政事可以及物。」とある。

- 6 李鴻藻：1820～97。字は蘭蓀、寄雲、号は蘭孫、直隸高陽の人。咸豊2年（1852）の進士。山水画を描き、名画を収蔵した。

（西原 歩）

【No.148】

鮑青園<sup>1</sup>小伝一卷 新安鮑氏本

清鉄保<sup>2</sup>書。嘉慶七年勒石。伝文紀昀<sup>3</sup>所撰。附梅菴手簡一通云。舟行邳宿一帶。心境稍適。遂將碑文小伝俱写就。以郭公廟<sup>4</sup>筆意。少參以徐季海<sup>5</sup>。似覺厚重。小伝則以永興法為之。不知有合否。刻時須覓好手鈎出。至囑至囑。弟約八九月間回淮。彼時刻得多寄幾幅是望。上樹棠先生。嵌鉄保私印。督漕使者二印<sup>6</sup>。鑄者江都党夢濤也。帖止小伝無碑文。其用郭公廟法之書。遂不可見。肯園揚州塩商。曉嵐稱其子曰。樹棠侍御。迹其生平。肯園蓋富而好義者。揚州之紫陽書院是其修復。樹棠亦為顯臣。故能得紀曉嵐。鉄梅菴之文字。曾見肯園扇冊。乾嘉間名流書画略備。劉石菴。翁覃溪皆以老先生稱之。鄧完白為作四体書<sup>7</sup>各一冊。其草書一卷。亦有石本。是肯園亦篤嗜文墨。梅菴時為漕督。當與樹棠往還甚密。此書作之舟中。有閑逸之致。自言用永興法。惟筆肥不甚開展。於虞書未為合也。梅菴真書遜其行草。而碑伝必以正体。転不若尺牘較有豊韻矣。

清の鉄保の書、嘉慶七年（1807）の勒石。伝文は紀昀の撰する所、梅菴の手簡一通を附して云う、「邳宿一帶を舟行し、心境稍や適し、遂に碑文小伝を將て俱に写就す。郭公廟の筆意を以てし、少しく交うるに徐季海を以てするも、厚重を覚ゆるに似る。小伝は即ち永興（虞世南 558～638）の法を以て之を為るも、合う有るや否やを知らず。刻時須らく好手を覓めて鈎出すべし、至囑至囑。弟は約八九月の間に淮に回る、彼の時刻し得ば多く幾幅を寄せよ是れ望みなり。樹棠先生に上る。」と。「鉄保私印」、「督漕使者」の二印を嵌す、鑄者は江都の党夢濤なり。帖は止だ小伝のみにして碑文無く、其の郭公廟の法を用いるの書は、遂に見るべからず。肯園は揚州の塩商なり、曉嵐 其の子を称えて曰く、「樹棠侍御」と。其の生平を迹ぬれば、肯園は蓋し富にして義を好む者、揚州の紫陽書院も是れ其の修復。樹棠も亦た顯臣と為る、故に能く紀曉嵐、鉄梅菴の文字を得。曾て肯園の扇冊に見るに、乾嘉間の名流の書画略は備わる。劉石菴（塘 1719～1804）、翁覃溪（方綱 1733～1818）は皆な老先生を以て之を称す。鄧完白（石如 1743～1805）為に四体書<sup>7</sup>各一冊を作る。その草書一卷も亦た石本有り。是れ肯園は亦た篤く文墨を嗜み、梅菴時に漕督と為り、當に樹棠と往還甚だ密なるべし。此の書は此れを舟中に作り、閑逸の致有り。自ら永興の法を用うと言うも、唯だ筆肥えて甚だしくは開展ならず、虞書に於て未だ合すと為さず。梅菴の真書は其の行草に遜る。而して碑伝必ず正体を以てしたれば、転つて尺牘の較や豊韻有るに若かず。

【注】

- 1 鮑青園：鮑志道（1743～1801）。字は誠一、肯園は号、徽州歙県の人。
- 2 鉄保：1752～1824。字は冶亭、号は梅菴また惟清齋、満洲正黄旗の旗人出身。乾隆37年（1772）に進士となり、官は翰林院侍読学士より両江総督に累進した。
- 3 紀昀：1724～1805。字は曉嵐、直隸河間の人。乾隆19年（1754）の進士、累官して協弁大学士となり、太子太保を加えられた。四庫全書を総纂した。
- 4 郭公廟：顔真卿の書。広徳2年（764）の成碑。全称は有唐故中大夫使持節寿州諸軍事寿州刺史上柱国贈太保郭公廟碑銘。
- 5 徐季海：徐浩（703～82）。季海は字、浙江紹興の人。文書ともに長け玄宗 肅宗 代宗 徳宗の親任を得、再三の貶にもかかわらず太子少師を贈られた。書に嵩陽觀聖徳感應頌、朱巨川告身帖、大証禪師碑、不空和尚碑ほかがある。
- 6 鉄保私印、督漕使者二印：『中国書画家印鑑款識』下巻、1601頁に見える。

【No149】

蘇文忠公坐位帖二卷<sup>1</sup> 西安本

宋蘇軾書。臨顏平原争坐位帖全文。字大如拳。却不相等。有自題云<sup>2</sup>。与嘗謂書至魯公。天下能事畢矣。或云漢有崔張。晋有羲猷。安能魯公独擅其長。予曰不然。昔在内府觀上古遺文。筆迹皆中鋒直下。絶無媚態。漢晋以来專以側鋒取妍。大失古人本旨。魯公鋒勢中正。直抵蒼頡。掃尽漢晋媚習。但觀徵坐位帖。即知吾言不謬。簿書之暇。沐浴焚香。大小臨數十卷。元祐六年書於維揚官署<sup>3</sup>。此書如何姑不論。觀此跋可知其庸妄。謂漢晋人側鋒取妍。此何等語。而可以誣長公。且公何曾官於揚州。又跋中論字誤作倫。争誤作徵<sup>4</sup>。是直胸無点墨者所為。何足欺人。竟有盲於目而盲於心者奉為大宝。取以勒石。蘇書贗本固多。然敢妄作長跋詆斥漢晋。謬種如此矣所僅見。搨本流传。竟有装成巨冊。目為蘇書最佳之本。大書其端曰蘇文忠公争坐位帖。侮辱前賢莫此為甚。後有印曰西京邵氏家藏<sup>5</sup>。非惟可笑。直可惡矣。

宋の蘇軾（東坡）の書。顏平原（真卿）の争坐位帖全文を臨す。字は大きさは拳の如きも、却って相等しからず。自題有りて云う、「与に嘗て謂う、書は魯公（顏真卿）に至りて天下の能事畢わる、と。或いは云う、漢に崔（崔瑗）張（張芝）有り、晋に羲（王羲之）猷（王猷之）有り。安くんぞ能く魯公独り其の長を擅にせん、と。予曰く、然らずと。昔内府に在りて上古の遺文を觀る。筆迹は皆な中鋒直下して、絶えて媚態無し。漢晋以来専ら側鋒を以て妍を取り、大いに古人の本旨を失す。魯公は鋒勢は中正にして、直ちに蒼頡に抵り、漢晋の媚習を掃き尽くす。但だ徵（争）坐位帖を觀れば、即ち吾が言の謬らざるを知る。簿書の暇、沐浴し香を焚き、大小臨すること数十卷。元祐六年（1091）維揚の官署に書す。」と。此の書如何なるやは姑く論ぜず。此の跋を觀るに其の庸妄たるを知るべし。漢晋の人側鋒もて妍を取ると謂うは、此れ何等の語にして、以て長公を誣うべけんや。且つ公何ぞ曾て揚州に官せんや。又た跋中の「論」の字は誤りて「倫」に作り、「争」は誤りて「徵」に作る。是れ直だ胸に点墨無き者の為す所なり。何ぞ人を欺くに足らん。竟に目に盲なりて心に盲なる者奉りて大宝と為し、取りて以て勒石する有り。蘇書の贗本固より多し。然れども敢えて長跋を妄作し漢晋を詆斥す。謬種の此くの如きは実に僅かに見る所。搨本流传し、竟に巨冊を装成し、目して蘇書の最佳の本と為し、其の端に大書して蘇文忠公争坐位帖と曰う有り。前賢を侮辱すること此くのごとく甚しきを為すは莫し。後に印有「西京邵氏家藏」と曰うは、惟だに笑うべきのみに非ず、直ちに惡むべし。

〔注〕

- 1 蘇文忠公坐位帖二卷：未検。
- 2 有自題云：未検。
- 3 元祐六年書於維揚官署：維揚は揚州の別称。蘇軾が揚州に官せられるのは元祐七年（1092）であり、跋文の内容と合わない。また後文の「公何曾官於揚州」も誤りである。
- 4 又跋中論字誤作倫争誤作徵：引用跋文中に「倫」字が見えず、当該跋文は未検。また、「徵」の誤字は音韻の近さによると考えられる。なお「争」「徵」の音韻が同じになるのは元の『中原音韻』以後である。
- 5 西京邵氏家藏：印は未検。西京とは洛陽。『邵氏聞見録』卷に「山谷東坡」の一節があり、洛陽の出の邵博と想定する。

(安藤喜紀)

【No150】

岳忠武書古詩一卷 衡陽彭氏本

宋岳飛<sup>1</sup>書。款云紹興八年秋仲月既望。前有崇禎四年辛未五月望日勅覽二行。鈐崇禎之寶四字方印。八城御史永安將軍孫文陽敬藏。卷尾跋云壬子夏太倉州張祉祥移來先武穆公墨迹手卷送余。展玩之下。其筆法淋漓。遒勁秀拔。固為世所珍貴。誠一代之書豪也。甲寅秋日。適秋帆夫子來署同觀。因誌數語於後。以敘獲是卷之顛末云爾。乾隆五十八年七月孫齡重裝敬識。書與世所傳前後出師表相似。而首尾題字則出一手。贗迹也。忠武之為人。固不必以書重。且亦未必工書。好事者因重其人。思得其遺墨。於是偽本層出不窮。凡取得者莫不刻石。如出師二表。再刻三刻<sup>2</sup>。果於忠武何涉。即滿江紅詞及二札<sup>3</sup>。

具元人題識者<sup>4</sup>。流傳最久。亦不可信。此文陽與齡二題識。借岳氏後裔之名以飾其偽。而偽乃愈不可掩。其南昌袁氏<sup>5</sup>天籟閣<sup>6</sup>。商丘宋氏<sup>7</sup>諸藏印。凡偽迹莫不有。不足為挾。衡陽彭氏從而勒之石。不過多增一岳書偽本而已。宋の岳飛の書、款に云う「紹興八年（1138）秋仲月既望」と。前に「崇禎四年（1631）辛未五月望日勅覽」の二行有り。「崇禎之寶」の四字方印を鈐す。八城御史永安將軍の孫文陽の敬藏。卷尾の跋に云う「壬子（1672）夏太倉州の張祉祥先武穆公の墨迹手卷を移し來たりて余に送る。展玩の下、其の筆法淋漓、遒勁秀拔、固より世の珍貴する所と為る、誠に一代の書豪なり。甲寅（1674）秋日、適たま秋帆夫子署に來たりて同に觀る。因りて數語を後に誌し、以て是の卷を獲るの顛末を敘して爾云う。乾隆五十八年（1793）七月孫齡重裝して敬みて識す。」と。書は世に伝わる所の前後出師表と相似る。而して首尾題字は則ち一手に出で、贗迹なり。忠武の人と為りは、固より必ずしも書を以て重んぜず、且つ亦た未だ必ずしも書に工ならず。好事者其の人を重んずるに因りて、其の遺墨を得んことを思い、是に於て偽本層出して窮まらず。凡そ取得する者は石に刻せざるは莫し。出師二表の如きは、再刻三刻するも、果して忠武に於て何か涉らん。即ち滿江紅詞及び二札の、元人の題識を具うる者は、流傳最も久しきも、亦た信ずべからず。此の文陽と齡との二題識は、岳氏の後裔の名を借りて以て其の偽を飾るも、偽りは乃ち愈いよ掩うべからず。其の「南昌の袁氏」「天籟閣」「商丘の宋氏」の諸藏印は、凡そ偽迹に有らざるは莫く、挾と為すに足らず。衡陽の彭氏従りて之を石に勒するは、多く一岳書の偽本を増すに過ぎざるのみ。

[注]

- 1 岳飛：1103～41。字は鵬挙。相州湯陰の人。諡は武穆、忠武。
- 2 再刻三刻：成都の武侯祠、南陽の武侯祠、湯陰の岳廟に現在それぞれ石刻を収蔵している。
- 3 滿江紅詞及二札：二札と元人の題識のあるものについては未詳。なお、滿江紅詞は明の嘉靖15年（1536）の徐階編『岳武穆遺文』に弘治15年（1502）浙江提学副使趙寛が書いた岳墳詞碑によって収録したのが初見である事などから、余嘉錫らに偽作説がある。
- 4 元人題識：ネットによれば、「元人的記載或題詠跋尾、從未見過此詞、但卻突然出現於400年後の明代中葉、不能不讓人生疑。」とされている。
- 5 南昌袁氏：不詳。『中国書画家印鑑款識』に同文印は見えない。
- 6 天籟閣：項元汴の収蔵印と同文。
- 7 商丘宋氏：不詳。宋犖の収蔵印に「商丘宋氏収蔵圖書」があるが、同文印は見えない。

(山下敬起)

【No151】

昭代楷法十卷 蕭鼎張氏本

清張仁厚<sup>1</sup>輯。仁厚字幼卿。善書画。精鑑別。以早世未能竟其学。謂習字必先正楷。古人難於仰企。近賢較易学歩。因輯石刻楷書為範本。其論清代書家。推汪士鋐<sup>2</sup>。劉墉。何紹基以為造詣至深。他家所弗能及。此彙所有墨搨裝成十冊。沈荃。汪士鋐。何焯<sup>3</sup>。王澐。張照。王文治。劉墉。梁同書。梁巘。孔繼涑<sup>4</sup>。陳雲<sup>5</sup>。何紹基。曾國藩十三人。惟陳雲之書不恒見。此心經字徑一寸。能合劉石菴。梁山舟二家之法。自成一體。而世鮮稱及之者。



知書画得名有幸不幸也。石菴正書罕有寸以上者。殆是避其所短。此鶴銘全文豐賦骨力不振。遜小楷甚遠。包慎伯自言其書得自簡牘。頗傷婉弱<sup>6</sup>。蓋簡牘。銘石未易兼工。石菴雖大家不能違此例也。他種皆習見者。惟松齋阜成書院頌<sup>7</sup>。乃其家刻之本。有汪樞汪枳<sup>8</sup>合印。松齋大楷石本往往失之散緩。此頌其合作。行筆蒼勁。四面円足。王虛舟之千文。張天瓶之祠堂碑<sup>9</sup>。均非其比。曾文正書祠金陵昭忠祠上諭<sup>10</sup>。學趙松雪。勻淨焉而已。

清の張仁厚の輯。仁厚は字は幼卿。書画を善くし、鑑別に精し。早世するを以て未だ其の學を竟むる能わず。謂へらく「習字は必ず正楷を先にす。古人は仰企に難し、近賢はやや學歩し易し。因りて石刻の楷書を輯め範本を為す。」と。其の清代の書家を論じては、汪士鋐、劉墉（1720～1804）、何紹基（1799～1873）を推して、以て「造詣至って深く、他家の及ぶ能わざる所。」と為す。此れは有する所の墨搨を彙めて十冊を装成す。沈荃、汪士鋐、何焯、王澐（1668～1739）、張照（1691～1745）、王文治（1730～1802）、劉墉、梁同書（1723～1815）、梁巘（1710～85ごろ）、孔繼涑、陳雲、何紹基、曾國藩（1811～72）の十三人。惟だ陳雲の書のみは恒には見ず。此の心経は字徑一寸、能く劉石菴（墉）、梁山舟（同書）二家の法を合わせ、自ら一体を成す。而れども世に之を称及する者鮮し。書画もて名を得るに幸不幸有るを知るなり。石菴の正書は寸以上の者有ること罕なり。殆ど是れ其の短とする所を避くるなり。此の鶴銘は全文豐賦にして骨力振るわず。小楷に遜ること甚だ遠し。包慎伯（世臣）は自ら言う、「其の書は簡牘より得たれば、頗る婉弱に傷る。」と。蓋し簡牘、銘石は未だ兼ねて工にし易からず。石菴は大家と雖も此の例に違ふ能わざるなり。他種は皆な習見する者。惟だ松齋（梁巘）の阜成書院頌のみは、乃ち其の家刻の本。「汪樞汪枳」の合印有り。松齋の大楷の石本は往往にして之を散緩に失う。此の頌は其の合作。行筆蒼勁、四面円足。王虛舟（澐）の千文、張天瓶（照）の祠堂碑は、均しく其の比に非ず。曾文正（國藩）の書する金陵昭忠祠上諭は趙松雪を學びて、焉を勻淨するのみ。

[注]

- 1 張仁厚：未検
- 2 汪士鋐：1658～1723。字は文升、号は退谷、秋泉、江蘇省蘇州の人。康熙36年（1697）の進士。『瘞鶴銘考』ほかがある。
- 3 何焯：1661～1722。字は杞瞻、号は茶山ほか、江蘇省吳県の人。康熙42年（1703）の進士。『義門読書記』『義門題跋』がある。
- 4 孔繼涑：1727～91。字は信夫、体実、号は谷園、東山、葭谷、山東曲阜の人。乾隆33年（1768）の挙人。『玉虹樓帖』『玉虹鑑真帖』『玉虹摹古帖』がある。
- 5 陳雲：生歿年不明。字は銘軒、号は睡足樓。海陽の人。『詞林輯略』に「預弟字遠雯、号起浴、順天宛平人。授編修、改吏部員外郎、官至安徽廬州府知府。」とある。
- 6 其書得自簡牘。頗傷婉弱：『芸舟双楫』述書上に「然余書得自簡牘、頗傷婉麗」とある。また、『広芸舟双楫』執筆に「書得於簡牘、頗傷婉麗」とある。
- 7 阜成書院頌：未検
- 8 汪樞汪枳：未検
- 9 祠堂碑：武侯祠堂碑
- 10 曾文正書祠金陵昭忠祠上諭：同治三年（1864）、曾國藩は弟の曾國荃とともに金陵における太平天国の乱を平定した。國荃は皇帝より上諭を賜り、功績が称され太子少保などの位を与えられた。これはその上諭を國藩が書したものか。なお、金陵湘軍昭忠祠の建立に当たって、曾國藩が撰して書した「金陵湘軍陸師昭忠祠記」がある。

（船田聖也）

【No152】

怡顏齋縮臨醴泉銘一卷 宛平陳氏本

清陳壽昌書。光緒丁亥勒石。壽昌。字嵩侔。藏歐書九成宮醴泉銘宋拓本。文字完全無欠。專意臨摹。遂能酷肖。此本縮為小字。尤其最得意者。因覓良工勒石。潘祖蔭。王先謙。陸懋宗。洪鈞。任道鎔皆有題跋。書各有其體貌。二王父子不能相同。即率更自書。此銘與其他碑刻亦不尽同。比之作文。豈能千篇一律。而此糸毫不敢變易。必肖其形乃止。可謂難矣。近有學蘭亭者。不問書之大小。均依蘭亭規模。蘭亭以外之字。不復能書。書亦不能成字。猶自命為書家。嵩侔他書不曾見。不知於此臨本何如。正恐未必高妙。陸跋謂嵩侔注莊子數萬言。挾二千年不傳之秘。惜亦未見其著作。若如臨帖之拘泥。能得莊生旨乎。諸家均深讚美。謂直入率更之室。非徒襲取外貌。斯言適得其反。冊首並臨篆額。於此銘誠為完備。但無以解於海岳奴書之誚耳。任書學北體。而不知筆法。悉成偏軟。其格又出陳下。僅可謂為趙搗叔派。於北碑無涉也。

清の陳壽昌の書。光緒丁亥（13年 1887）の勒石なり。壽昌は、字は嵩侔。歐書の九成宮醴泉銘の宋拓本を蔵す。文字は完全無欠。意を専らにして臨摹し、遂に能く酷だ肖る。此の本縮めて小字を為す。尤も其の最も得意の者。因りて良工を覓めて石に勒す。潘祖蔭、王先謙、陸懋宗、洪鈞、任道鎔皆な題跋有り。書は各おの其の體貌有れば、二王父子も相い同じくする能わず。即ち率更（歐陽詢）の自書も、此の銘と其の他の碑刻とは亦た尽くは同じからず。之を作文に比ぶれば、豈に能く千篇一律ならんや。而るに此れは糸毫も敢て變易せず、必ず其の形を肖せて乃ち止む。難しと謂うべし。近ごろの蘭亭を學ぶ者は、書の大小を問わず、均しく蘭亭に依りて規模し、蘭亭以外の字は、復た書く能わず。書も亦た字を成さずして、猶お自ら命じて書家と為す。嵩侔の他書は曾て見ず。知らず此の臨本に於て何如なるやを。正に恐らくは未だ必ずしも高妙ならず。陸跋に謂う「嵩侔の【莊子】に注する數萬言は、二千年の不傳の秘を挾る。」と。惜しむらくは未だ其の著作を見ず。若し臨帖の拘泥の如くんば、能く莊生の旨を得んや。諸家は均しく深く讚美して、直ちに率更の室に入りて徒だに外貌を襲取するのみならずと謂う。斯の言は適たま其の反を得。冊首に並びに篆額を臨す。此の銘に於て誠に完備と為す。但だ以て海岳（米芾 1051～1107）の奴書の誚を解く無きのみ。任の書は北體を學ぶ。而れども筆法を知らず、悉く偏軟を成し、其の格は又た陳の下に出づ。僅かに趙搗叔（之謙 1829～84）の派と為すと謂うべきのみ。北碑に於て渉る無きなり。

【注】

- 1 陳壽昌：生歿年不詳。原名は延壽、またの字は小雲。山陰（今の浙江紹興）の人。咸豐9年（1859）の舉人。山東の人。書法に工。画は花卉を善くした。
- 2 潘祖蔭：1830～89。字は伯寅、号は鄭盦、諡は文勤、江蘇省吳興（蘇州）の人。咸豐2年（1852）の進士。官は工部尚書に至った。
- 3 王先謙：1842～1917。字は益吾、号は葵園、湖南省長沙の人。同治4年（1865）の進士。官は國子監祭酒。江蘇學政などの學官を歴任。
- 4 陸懋宗：1841～1915?。字は德生、号は雲孫、江蘇常熟の人。
- 5 洪鈞：1839～93。字は陶士、号は文卿、清末の外交官。歴史學者。
- 6 任道鎔：1823～1906。字は筱沅、号は寄鷗、江蘇宜興の人。道光29年（1849）の拔貢。浙江巡撫に至る。
- 7 奴書：米芾の1097年の「与魏泰唱和詩」の中に「老厭奴書不換鶯。」とある。また【宝晋英光集】卷8に「書謂弄翰。謂把筆輕自然手心虛、振迅天真、出於意外所。以古人書、各各不同。一一相似、則奴書也。」とあり、後者は【群玉堂米帖】に見える行書帖である。

（郭 梓瑩）

【No.153】

青芬閣米帖<sup>1</sup>十八卷 汾州王氏本 今石在故宮

清王亶望輯。亶望字味隲。汾州人。官巡撫。彙刻米書四集。每集四卷。附昼錦堂記。離騷經各一卷。共十八卷。宋人彙刻米帖。如宋高宗刻及宝真齋<sup>2</sup>等全帙皆不得見。此刻卷帙最富。可稱大觀。然其中偽蹟甚多。初集為政帖。十紙說。天馬賦。米氏庵帖。昌黎詩帖。德行道芸帖。画獅讚。丹青引。祝詞帖。杜律帖。二集龍井記。易義帖。手植檜贊。阿房宮賦。昼錦堂記。三集小字露筋碑。行雨山銘。刀銘。書評。論顏書帖。虎丘詩。春賦。笙台賦。長史帖。杜詩帖。貞孃墓歌。四集寄紹彭詩<sup>3</sup>。海月像贊。動靜交相養賦。寄薛郎中詩。簾間堂記。離騷經。計偽者三十二帖。有采自旧刻者。有模自墨迹者。篇幅皆長。殆過全帖之半。梁山舟<sup>4</sup>。王夢樓<sup>5</sup>均為作跋<sup>6</sup>。頗致讚美。惟梁有肉眼觀之謂多贗鼎之語。蓋以亶望官位既尊。自以為是。不肯顯斥其謬耳。刻帖以伝古人。貴其真也。薰蕕共器<sup>7</sup>。牛驥一皂<sup>8</sup>。直是侮辱古人。茲一一表而出之。惡莠<sup>9</sup>尽薙。嘉卉畢呈。霧蠹既掃。月星復朗。老米有知。當亦稱快。石在故宮。拓時汰偽存真。可省工費之半。存全帙者。了然真偽之分。校其異同。亦有裨於鑑古。偽書優劣故不相等。既非米蹟。即應刪除。亶望真肉眼哉。

清の王亶望の輯。亶望は字は味隲、汾州の人、官は巡撫。米書四集を彙刻す。每集四卷、昼錦堂記、離騷經各一卷を附す。共に十八卷。宋人の米帖を彙刻するも、宋の高宗の刻及び「宝真齋」の如きは全帙皆な見るを得ず。この刻は卷帙最も富み、大觀と称うべし。然れども其の中に偽蹟甚だ多し。初集は「為政帖」「十紙說」「天馬賦」「米氏庵帖」「昌黎詩帖」「德行道芸帖」「画獅讚」「丹青引」「祝詞帖」「杜律帖」。二集は「龍井記」「易義帖」「手植檜贊」「阿房宮賦」「昼錦堂記」。三集は「小字露筋碑」「行雨山銘」「刀銘」「書評」「論顏書帖」「虎丘詩」「春賦」「笙台賦」「長史帖」「杜詩帖」「貞孃墓歌」。四集は「紹彭に寄するの詩」「海月像贊」「動靜交相養賦」「薛郎中に寄するの詩」「簾間堂記」「離騷經」。計るに偽なる者三十二帖。旧刻より采る者有り、墨迹より模する者有り。篇幅は皆な長く、殆ど全帖の半を過ぐ。梁山舟、王夢樓 均しく為に跋を作り、頗る讚美を致す。「惟だ梁は肉眼もて之を觀て贗鼎多しと謂う」の語有り。蓋し亶望の官位既に尊きを以て、自ら以て是と為し、肯て其の謬りを顯斥せざるのみ。帖を刻して以て古人を伝うるは、其の真なるを貴ぶなり。薰蕕器を共にし、牛驥皂を一にするは、直ちに是れ古人を侮辱するのみ。茲に一一表して出す、惡莠尽く薙り、嘉卉畢く呈し、霧蠹既に掃して、月星復た朗らかなり。老米知る有らば、當に亦た快と称すべし。石は故宮に在り、拓する時 偽を汰げ真を存し、工費の半を省くべし。全帙を存する者、真偽の分に了然たりて、其の異同を校ぶるは、亦た鑑古に裨ふ有り。偽書の優劣は故より相い等しからざるも、既に米蹟に非ざれば、即ち應に刪除すべし。亶望は真に肉眼ならんや。

[注]

- 1 青芬閣米帖：青は清の誤写。乾隆39年（1774）刻成。米芾の書166種を刻入する專帖。米芾の專帖中第一の数量。
- 2 宝真齋：『宝真齋法書贊』28卷。南宋・岳珂の撰。米芾の書は第19、20卷にあり。
- 3 紹彭：薛紹彭（生歿年不詳）。北宋の人。字は道祖、号は翠微居士。山西省河東（一説に陝西省西安）の人。
- 4 梁山舟：梁同書（1723～1815）。字は元穎、山舟は号。浙江省錢塘の人。劉墉、翁方綱、王文治とともに帖学の四大家と称された。書論に『頻羅庵論書』專帖に『弁香樓帖』がある。
- 5 王夢樓：王文治（1730～1802）。字は禹卿、号は夢樓。江蘇省丹徒の人。
- 6 作跋：『頻羅庵遺集』卷10所収の『快雨堂題跋』に「王味隲刻米帖四集跋」があり、「……世眼視之疑此中或有贗鼎者、而中丞公神與之契、鑑賞在筆墨之外、謂非米老、那得凌紙怪發……」とある。
- 7 薰蕕共器：薰は香草の一種。蕕は惡臭のする草。善と惡とが混在する意。
- 8 牛驥一皂：賢者と愚者とが同等に遇されていることのとえ。ここでは、玉石混交の意。
- 9 惡莠：惡莠は後文の嘉卉の反対語。雜草。ここでは偽跡を指す。

（張 宇寧）

【No.154】

隰西草堂集十二卷 銅山董氏本

明万寿祺<sup>1</sup>著。寿祺字若。又字年少。崇禎庚午科举人。国変後隱於僧。曰沙門慧寿。世稱為万道人。書画篆刻。莫不精妙。其詩文与沛閻古古集。同為禁書<sup>2</sup>。銅山举人丁泗吉<sup>3</sup>靖山。録詩一冊。秘藏之。非全帙也。道光時。拔貢孫運錦繡田。得手書文稿殘本。合丁氏所録詩。刻為隰西草堂集<sup>4</sup>。集自遭禁而後。清初刻本無一存。其後人亦莫敢藏弄。孫氏多方採輯。得文三卷。詩五卷。詞一卷。刊成印布無多。而板已失。蓋為撚乱所燬。光緒時。徐州府知府桂中行履真。刻二遺民集<sup>5</sup>。於孫本略有刪節。孫本又不復可得。邑人董士恩<sup>6</sup>袖岑。重刻之。文及雜著四卷。詩五卷。補遺一卷。詞一卷。年譜一卷。共十有二卷。成於癸酉之冬。万集無多於此本者。上虞羅振玉叔言。曾為年少年譜。此譜則蕭李輔中<sup>7</sup>允庵新編。李曾見万氏家乘。故視羅氏本為詳。集中多国変以後之作。芬芳悱惻。其託体峻潔。為閻氏所不之逮。閻万齊名。古古年逾八旬。詩篇故富。道人五十而終。閻之子孫。有得科举名。登仕版者。道人後裔。居徐城北。終清之世。皆耕讀守鄉井。其詩云。父老安知王氏臘。子孫不受北朝官<sup>8</sup>。讀者哀其志焉。

明の万寿祺の著。寿祺は字は若、又た字は年少。崇禎庚午（3年 1630）の科举の人。国変の後 僧に隠れ、沙門慧寿と曰う。世 称して万道人と為す。書画篆刻は、精妙ならざるは莫し。其の詩文は沛の閻古古集と共に禁書と為る。銅山の举人 丁泗吉靖山は、詩一冊を録め、之を秘藏するも、全帙に非ざるなり。道光（1821～1850）の時、拔貢の孫運錦繡田、手書の文稿残本を得、丁氏録する所の詩と合し、刻して隰西草堂集を為す。集は禁に遭いてより後、清初の刻本は一として存するもの無く、其の後の人も亦た敢えて藏弄するもの莫し。孫氏は多方採輯す。文三卷。詩五卷。詞一卷を得、刊成するも印布多くは無し。而して板已に失う。蓋し撚乱の燬く所と為る。光緒（1875～1908）の時、徐州府知府の桂中行履真、二遺民集を刻す。孫本に於て略ぼ刪節する有り、孫本も又た復た得べからず。邑人の董士恩袖岑、之を重刻す。文及び雜著四卷、詩五卷、補遺一卷、詞一卷、年譜一卷、共に十有二卷。癸酉（民国22年 1933）の冬に成る。万の集は此の本より多き者無し。上虞の羅振玉叔言（1866～1940）、曾て年少の年譜を為る。此の譜は則ち蕭の李輔中允庵の新編なり。李曾て万氏の家乗を見る。故に羅氏本に視べて詳らかと為す。集中は国変以後の作多し。芬芳として悱惻す。其の体を峻潔に託するは、閻氏の之に逮ばざる所と為す。閻万は名を齊しくす。古古は年は八旬を逾え、詩篇故に富む。道人は五十にして終わる。閻の子孫に、科举の名を得て、仕版に登る者有り。道人の後裔は、徐の城北に居り、清の世終わりては、皆な耕讀し郷井を守る。其の詩に云う「父老安くんぞ王氏の臘を知らん。子孫は北朝の官を受けず。」と。讀者 其の志を哀れむ。

【注】

- 1 万寿祺：1603～52。江蘇省徐州の人。崇禎3年（1630）の举人。著に『印説』『論墨』がある。
- 2 其詩文与沛閻古古集同為禁書：閻爾梅（1603～79）の著。No.155閻古古集 6卷参照。
- 3 丁泗吉：1698～1760。字は淑泥、靖山は号。雍正13年（1735）の举人。
- 4 孫運錦繡田得手書文稿殘本合丁氏所録詩刻為隰西草堂集：『清詩紀事初編』卷1万寿祺の項に「其集為呂維揚刻于康熙二十四年（1685）者久佚。道光四年（1824）運錦為輯刻隰西草堂詩集五卷。文集三卷。遜渚唱和集一卷。近人刻明季三孝廉集。復為增輯遺文九首。詩二十九首。」とある。
- 5 桂中行履真刻二遺民集：？～1895。履真は字。No.155閻古古集 6卷に「光緒時臨川桂中行守徐。以白登山人及万年少之隰西草堂。合刻為二遺民集。」とある。
- 6 董士恩：1877～1949。袖岑は字。
- 7 李輔中：1873～1954。字は僧允、台庵、江蘇省徐州の人。
- 8 其詩云父老安知王氏臘子孫不受北朝官者：『後漢書』列伝第36陳寵伝に「我先人豈知王氏臘」とある。

（池田絵理香）

【No.155】

閩古古全集六卷 泗陽張氏本

明閩爾梅著。爾梅。字用卿。号古古。又号白耄山人。江蘇沛県人。崇禎三年举人。值明代鼎革。有匡復之志。及見事不可為。薙髮称蹈東和尚。徧游天下名山水。游屐所至。以名其集。如南直隸集。北直隸集。山東集。河南集等。各体詩皆以地別。乾隆時列於禁書。遂無伝本。光緒時臨川桂中行守徐<sup>1</sup>。以白耄山人及万年少之隰西草堂。合刻為二遺民集<sup>2</sup>。存詩比此本止十之一二。蓋無從得全稿也。山人文乃後人綴拾而成。非其手定。存者尤少。民国初年。泗陽張相文蔚西<sup>3</sup>得山人自刻詩。重輯年譜並遺文。為之印行。共六卷。其卷二至卷五。包括全詩廿有九卷。首卷則年譜序跋。末卷文集。於是山人之詩。得窺全豹。惟文僅取之二遺民集。不能多有增益。山陽魯一同<sup>4</sup>通甫。於道光時編山人年譜。以未見其全詩。不無簡略。蔚西之譜加詳。於万年少事蹟。亦附列焉。閩。万世所並称。二人遭際及品格。略相似也。明季遺老於種族之痛最深。時流露文墨間。故禁之特嚴。雖其後裔莫敢存儲。蔚西得於平肆。乃絕無僅有之本。此書若歸他人。縱極珍守。未必重印以伝。壬戌三月書出。争相購取。僉謂此集流布。不終磨滅。殆山人之靈有以黙相之。豈偶然哉。蔚西遂於輿地学。枹地学会。出雜誌廿余年。積百數十冊。迄今同志者猶能廢続其事。著南園叢稿。子星焯<sup>5</sup>。承其家学。知名於時。蔚西有功於斯集甚鉅。宜附載也。

明の閩爾梅（1603～79）の著。爾梅は、字は用卿、号は古古、又たの号は白耄山人。江蘇沛県の人。崇禎三年（1630）の举人。明代の鼎革に値り、匡復の志有るも、事の為すべからざるを見るに及んで、薙髮し蹈東和尚と称す。天下の名山水に徧游し、游屐の至る所、以て其の集に名づけ、南直隸集、北直隸集、山東集、河南集等の如く、各体の詩、皆な地を以て別かつ。乾隆（1736～95）の時 禁書に列せらる。遂に伝本無し。光緒（1875～1908）の時 臨川の桂中行 徐に守たり、白耄山人 及び万年少（寿祺 1603～52）の隰西草堂を以て、合せて刻し二遺民集を為す。存詩は此の本に比ぶれば止だ十の一二のみ。蓋し全稿を得るに從る無きなり。山人の文は乃ち後人 綴拾して成る。其の手ずから定むるに非ず。存する者は尤も少し。民国初年、泗陽の張相文蔚西 山人の自刻の詩を得て、年譜並びに遺文を重輯し、之れが為に印行す。共に六卷。其の卷二より卷五に至るまでは、全詩廿有九卷を包括す。首卷は則ち年譜の序跋。末卷は文集。是に於て山人の詩 全豹を窺い得。惟だ文は僅かに之れを二遺民集に取るのみ。多く増益有ること能わず。山陽の魯一同 通甫、道光（1821～50）の時に於て山人年譜を編む。未だ其の全詩を見ざるを以て、簡略無くんばあらず、蔚西の譜は詳を加え、万年少の事蹟に於ても、亦た焉に附して列ぬ。閩、万は世に並称せられ、二人の遭際及び品格は、略は相い似るなり。明季の遺老は種族の痛みに於て最も深し。時に文墨の間に流露す。故に之れを禁ずること特に厳しく、其の後裔と雖も敢へて存儲する莫し。蔚西の平肆に得るは、乃ち絶無僅有の本。此の書 若し他人に歸すれば、縦い珍守を極むとも、未だ必ずしも重印を以て伝えず。壬戌（1922）三月の書出で、争いて相い購取す。僉な謂う「此の集は流布したり、終に磨滅せず。」と。殆ど山人の靈、以て之を黙相する有り。豈に偶然ならんや。蔚西は輿地学に於て遠く、地学会を枹め、雑誌を出だすこと廿余年、百数十冊を積む。今に迄んで同志の者 猶お能く其の事を廢続す。著は南園叢稿。子の星焯、其の家学を承け、名を時に知らる。蔚西は斯の集に功有ること甚だ鉅なり。宜しく附載すべきなり。

[注]

- 1 光緒時臨川桂中行守徐：桂中行についてはNo.154参照。【清史稿】列伝238に「光緒元年（1875）署徐州。」とある。
- 2 二遺民集：No.154参照。
- 3 張相文蔚西：1866～1933。蔚西は字、号は南園、沌谷。江蘇省泗陽の人。地理学家。
- 4 魯一同：1804～63。一説1805～63。字は蘭岑、通甫は号、江蘇省泗陽の人。道光15年（1835）の举人。詩画に工み。
- 5 星焯：張相文の子。1887～1951。字は亮塵、亮臣。史学家。著に『泗陽張沌谷居士年譜』がある。

（西原 歩）

【No.156】

思古齋<sup>1</sup>石刻一卷 頴上本

蘭亭序黃庭經各一種。刻一石之兩面。帖首有思古齋石刻五篆字。蘭亭首云唐臨絹本。尾有永中<sup>2</sup>及墨妙筆精二印。墨妙筆精。宋參知政事蘇太簡<sup>3</sup>家印。見英光集跋<sup>4</sup>。永仲姓蔣<sup>5</sup>。為米元章之友。群玉堂帖米書<sup>6</sup>。蔣永仲作松贈曇秀。吾題云撐雲既奇倔怒節更堅瘦。怒為露也。疑此石即宋蔣永仲刻。後有龔丘張登雲跋<sup>7</sup>。登雲山東兗州府寧陽縣人。明隆慶辛未進士。工書。謂此刻民間掘井所得。風神遒勁。大近褚筆。邢子愿來禽館集云<sup>8</sup>。嘉靖八年。頴上村民耕得此石送県治。県官不省視。送学官。学官益不省視。齋夫移置隣壁磨房。凡來磴者坐其上。真若明妃嫁呼韓。有余辱矣。逮丁酉孔文谷洩憲是邦。亟屬姜尹龔諸明倫堂中。黃庭另一石。龔左右列。徐昼堂<sup>9</sup>圭美堂集。謂姜葦間<sup>10</sup>先生以黃庭五十七行本為鎮海本<sup>11</sup>。而真頴為五十八行。此經凡褚臨者皆欠入清冷淵見吾形其成還丹可長生下有華蓋動見精三句。故比他本独少一行。而徐氏乃拋葦間之論。以真頴為鎮海。殊大謬誤。蓋由此刻明季石碎<sup>12</sup>。世間皆覆刻。鮮有識其真者。邢子愿誤以蘭亭黃庭為兩石。宋牧仲<sup>13</sup>誤以為一石分前後。且有誤思古為師古者同属一刻。徐昼堂則謂蘭亭為以右軍真蹟入石。黃庭則譏其点画木強字形粗糙。持論之無憑準若是。総之。此石宋刻能以粗漫伝神。覆刻雖極形似。神理懸殊。近人於刻之真偽不能弁。尚何言書之得失乎。

蘭亭序、黃庭經各一種。一石の両面に刻す。帖首に「思古齋石刻」の五篆字有り。蘭亭の首に云う「唐臨絹本」と。尾に「永中」及び「墨妙筆精」の二印有り。「墨妙筆精」は、宋の參知政事の蘇太簡の家の印なり、『英光集』の跋に見ゆ。永仲 姓は蔣、米元章（帯 1051～1107）の友為り。群玉堂帖の米（芾）書に「蔣永仲 松を作りて曇秀に贈る。吾 題して云う『雲を撐えて既に奇倔、節を怒（露）して更に堅瘦』、怒は露と為す。」と。疑うらくは此の石は即ち宋の蔣永仲の刻なり。後に龔丘の張登雲の跋有り。登雲は山東兗州府寧陽縣の人、明隆慶辛未（5年 1571）の進士、書に工みなり。謂う「此の刻は民間の井を掘りて得る所、風神遒勁、大いに褚（遂良 596～659）筆に近し。」と。邢子愿（侗 1551～1612）の『來禽館集』に云う、「嘉靖八年（1529）、頴上の村民 此の石を耕得して県治に送る、県官は省視せず。学官を送るも、学官は益ます省視せず。齋夫は 隣壁の磨房に移置し、凡そ来たりて磴する者は其の上に坐す、真に明妃の呼韓に嫁ぎて余辱有るが若し。丁酉（1537）孔文谷の憲に是の邦に洩むに逮びて、亟やかに姜尹に属して諸を明倫堂中に龔せしむ。黃庭は別の石、左右に龔して列す。」と。徐昼堂の圭美堂集に謂う、姜葦間先生は黃庭五十七行本を以て鎮海本と為す、而れども真頴は五十八行為り。此の經は凡そ褚の臨なる者は皆な「清冷の淵に入り吾の形を見る、其れ還丹を成し長生すべし、下に華蓋の動く有りて精を見る」の三句を欠く、故に他本と比べ独り一行少し。而れども徐氏は乃ち葦間の論に抛り、真頴を以て鎮海と為すは、殊に大いに謬誤なり。蓋し此の刻は明季に石碎かれ、世間 皆な覆刻し、其の真を識る者有ること鮮なきり由る。邢子愿は誤りて蘭亭黃庭を以て兩石と為し、宋牧仲は誤りて以て一石を前後に分かる為し、且つ思古を誤りて師古と為す者有り同じく一刻するを属せしむ。徐昼堂は則ち蘭亭は右軍の真蹟を以て石に入ると為すと謂う、黃庭は則ち其の点画は木強にして字形は粗糙たりと譏る。持論の憑準無きことは是の若し。之を総ぶるに、此の石の宋刻は能く粗漫を以て神を伝う、覆刻は形似を極むと雖も、神理は懸殊たり、近人刻の真偽に於てすら弁ざる能わず、尚お何ぞ書の得失を言わんや。

【注】

- 1 思古齋：元の応本（生歿年不詳）の齋号。
- 2 永中：永仲の誤記。
- 3 蘇太簡：蘇易簡（958～997）。太簡は字、梓州銅山の人。宋太平興国5年（980）の進士第一で、官は參知政事に至った。著に『文房四譜』『統翰林志』などがある。
- 4 英光集跋：「墨妙筆精」印は『宝晋英光集』卷7「跋王右軍帖」見える。
- 5 永仲姓蔣：蔣長源。生歿不詳。永仲は字、官は大夫に至った。
- 6 羣玉堂帖米書：『米芾書法全集』所収『羣玉堂米帖』には見えない。なお同全集の法帖卷9「宋拓米襄陽行

書」に当該文が見える。

- 7 張登雲跋：『六芸之一録』卷161には「此帖右軍真跡不佞……風神遒緊大近褚筆……」とある。提要では緊を勁に作る。
- 8 邢子愿來禽館集云：『來禽館集』卷21（『四庫全書存目叢書』）。文字に若干の異同がある。
- 9 徐昼堂：徐用錫（1656～？）。字は壇長、昼堂は号。康熙48年（1709）の進士。官は翰林院侍読に至った。
- 10 姜葦間：姜宸英（1628～99）。字は西溟、号は湛園。浙江慈溪の人。康熙36年（1697）の進士、官は翰林院編修に至った。著に『湛園集』八巻ほかがある。
- 11 鎮海本：未検。
- 12 明季石碎：乾隆『潁州府志』卷2古跡「旧学基」に「崇禎二年張俊英涖潁、搨数万紙而碎其石。旧志云石藏県庫、摹搨無虚日。石工段来厭其烦、潜碎之。二説不同。」と見える。
- 13 宋牧仲：宋荦（1634～1713）。牧仲は字、号は漫堂、絳津山人。晩年の号は西陂老人。河南商丘の人。官は吏部尚書に至った。著に『西陂類稿』ほかがある。

（鄭 緯）

#### 【No157】

##### 馬券帖一卷 嘉興学本

宋蘇東坡以所得賜馬。贈李方叔<sup>1</sup>。為書此券。子由題詩<sup>2</sup>。黄山谷作跋<sup>3</sup>。是蘇帖最著名者。流伝有嘉興学本及眉本。当以嘉興本為正。嘉興本旧在陸宣公祠<sup>4</sup>。明季石損。順治間補完。仍欠黃跋二十八字。書法遒勁。雖無入石年月。当屬宋刻本無疑。眉州本刻於万曆三年乙亥。沔陽陳文燭<sup>5</sup>督学眉州時。以家藏石本重勒。有郡人張景賢<sup>6</sup>跋。眉州知州莆田戴洪謨<sup>7</sup>州判黃州方保<sup>8</sup>立石。似即重摹嘉興本。書迹相似而石理頗粗。風神故遠遜。得者往往棄万曆間題識以充古搨。到莫知為何時入石。今嘉興本既多殘欠。眉本亦漫甚不可読。宋書宋刻。良不易覩。無論宋搨。近人見眉本之略旧者。便以為宋搨。詎知其刻於万曆時耶。又好古之士。罕知真偽。唐子方<sup>9</sup>得馬券墨迹。鄭子尹<sup>10</sup>氏為題詩。見巢經巢集<sup>11</sup>。凡読鄭詩者。必以此券為坡公真墨無疑矣。實則妄人鉤臨。於坡無涉。其遠遜石刻。尚不可道里計。然則鄭氏固優於為文。而疎於鑑別者矣。

宋の蘇東坡（軾）の賜うを得る所の馬を以て、李方叔に贈り、為に此の券を書す。子由（蘇轍 1039～1112）詩を題し、黄山谷（庭堅）跋を作る。是れ蘇帖の最も著名なる者。流伝に嘉興学本及び眉本有り。当に嘉興本を以て正と為すべし。嘉興本は旧くは陸宣公祠に在り。明季石損し、順治（1644～61）の間に補完するも、仍お黄跋二十八字を欠く。書法は遒勁。入石の年月無しと雖も、当に宋刻本に属すべきこと疑い無し。眉州本は万曆三年乙亥（1575）に刻す。沔陽の陳文燭の眉州の督学たる時、家藏の石本を以て重ねて勒す。郡人の張景賢の跋有り。眉州知州 莆田の戴洪謨と州判 黃州の方保の立石。即ち嘉興本を重摹するに似る。書迹は相似れども、石理は頗る粗なり。風神故に遠く遜る。得る者は往往にして万曆間の題識を棄て以て古搨を充つ。何れの時の入石と為すを知る莫きに到る。今は嘉興本は既に殘欠多し。眉本は亦た漫甚だしく読むべからず。宋書の宋刻は、良に覩やすからずして、宋搨に論無し。近人は眉本の略ぼ旧なる者を見れば、便ち以て宋搨と為す。詎ぞ其の万曆の時に刻すを知らんや。又た好古の士は、真偽を知ること罕なり。唐子方 馬券の墨迹を得、鄭子尹氏 為に詩を題す。『巢經巢集』に見ゆ。凡そ鄭詩を読む者は、必ず此の券を以て坡公の真墨と為して疑う無し。実は則ち妄人の鉤臨にして、坡に於て渉る無し。其の石刻に遠く遜ること、尚お道里もて計るべからず。然らば則ち鄭氏は固より文を為すに優るも、鑑別に疎き者ならん。

#### [注]

- 1 李方叔：1059～1109。名は鷹。方叔は字。号は濟南。華州の人、一説に陽翟の人。『宋史』卷444列伝203に伝がある。

- 2 子由題詩：『欒城集』卷16に『次韻李彥秀才來別子瞻仍謝惠馬』が見られる。
- 3 黄山谷作跋：『山谷題跋』卷1に「跋東坡所作馬券」が見られる。
- 4 陸宣公：陸贄（754～805）。字は敬輿、宣は諡。宰相。陸宣公祠は浙江省の孤山にある。
- 5 陳文燭：1525～？。字は玉叔、号は五嶽山人。
- 6 張景賢：1513～72。字は勉之、四川省眉州の人。嘉靖17年（1538）の進士。
- 7 戴洪謨：『湖南通志』卷76職官10に「戴洪謨、莆田拳人、江華県知県」の記載がある。
- 8 方保：未検。
- 9 唐子方：唐樹義（1793～1857）。子方は字。道光年間（1821～50）の拳人。唐鄂生の父。
- 10 鄭子尹：鄭珍（1806～64）。号は柴翁。道光17年（1837）の拳人。『巢經巢集』の他に『鄭学録』などの著書がある。
- 11 見巢經巢集：詩後集卷2に「題唐鄂生藏東坡書馬券真跡并序」が見られる。乙卯（1855）11月の作。

（安藤喜紀）

【No158】

燕喜堂帖四卷

不知誰所刻者。止宋蔡蘇黃米四家。蔡書五種。一 北苑十詠<sup>1</sup>小真書。有東坡跋。二 十三行跋。三 公謹太尉帖。四 隱居何事可謀生詩二截句<sup>2</sup>。五 会郡司門帖。十三行跋 公謹太尉帖。出戲鴻堂<sup>3</sup>。隱居詩出唐宋八家<sup>4</sup>。会郡司門帖出快雪。其北苑十詠及蘇題皆偽也。蘇書二種。一 西湖詩小行書十八首。二 集婦去來辭詩六首。無一真迹。黃書二種。一 梨花詩三十首。二 寄嶽雲帖。寄嶽雲帖出快雪堂、梨花詩不詳所出。有單行本。与山谷毫不相涉。米書四種。一 百花詩。二 甘露帖。三 破羌帖贊<sup>5</sup>。四 小字露筋碑<sup>6</sup>。百花詩出潑墨齋帖。純乎贗筆。甘露帖出快雪堂。而稍有刪節。破羌帖贊出宝晋齋。小字露筋碑。不詳所出。書尚不惡。然非米也。四卷中真者不能及半。且蘇字竟無一真。裝者塗去燕喜堂四字。不詳其故。或原刻尚多。不僅宋四家耶。四家書尚多伝本。既非取自墨迹。何難挾其精作。彙成一編。為学書者模範。即可不俟他求。奈何真贗不別。使魚目鼠璞等徧珠玉。端人正士。下儕但儉。刻帖之謬至此。所慮焚而棄之者矣。

誰の刻する所の者なるやを知らず。止だ宋の蔡（襄）、蘇（軾）、黄（庭堅）、米（芾）の四家のみ。蔡の書は五種。一は、北苑十詠の小真書、東坡の跋有り。二は、十三行の跋。三は、公謹太尉帖。四は、隱居何事可謀生詩の二截句。五は、会郡司門帖。十三行の跋、公謹太尉帖は戲鴻堂より出づ。隱居詩は唐宋八家より出づ。会郡司門帖は快雪（堂法書卷4）より出づ。其の北苑十詠及び蘇の題は皆な偽なり。蘇の書は二種。一は、西湖詩の小行書十八首、二は、集婦去來辭詩六首、一真迹無し。黄の書は二種。一は、梨花詩の三十首、二は、寄嶽雲帖。寄嶽雲帖は快雪堂（卷4）より出で、梨花詩は出づる所を詳らかにせず。單行本有るは、山谷と毫も相い涉らず。米の書は四種。一は、百花詩、二は、甘露帖、三は、破羌帖贊、四は、小字露筋碑。百花詩は潑墨齋帖（卷）より出づ、純乎たる贗筆。甘露帖は快雪堂（卷5）より出づるも而して稍や刪節有り。破羌帖贊は宝晋齋（帖）より出づ。小字露筋碑は出づる所を詳らかにせざるも、書は尚お悪しからず。然れども米に非ざるなり。四卷中真の者は半ばに及ぶ能わず、且つ蘇字は竟に一真無し。裝者は燕喜堂〔帖〕の四字を塗去す。其の故を詳らかにせず。或いは原刻尚お多く、僅かに宋の四家のみならずや。四家の書尚お伝本多し、既に墨迹より取るに非ず。何ぞ其の精作を挾ぶに難からん。彙めて一編を成し、学書者の模範と為せば、即ち他求するを俟たざるべきも、真贗別たず、魚目鼠璞をして徧を珠玉に等しくせしめ、端人正士をして下のかた但儉に儉しくせしむるに奈何。刻帖の謬り此に至る、応に焚きて之を棄つべき所の者なり。

【注】

- 1 北苑十詠：北苑、採茶、茶壘、出東門嚮北苑路、鳳池、龍塘、試茶、修貢亭、禦井、造茶の十首。



- 2 隱居何事可謀生詩二截句：「稼村詩帖其一」の七言絶句。
- 3 戲鴻堂：「洛神賦十三行唐搨本」の跋は『戲鴻堂法書』卷1に、「与公謹太尉帖書」は同じく卷11に見える。
- 4 唐宋八家：『唐宋八家集帖』。12卷。姚学経の撰集。
- 5 破羌帖賛：『米芾書法全集』法書3卷『宝晋齋帖』卷3に見える。
- 6 小字露筋碑：『米芾書法全集』法帖15卷『戲鴻堂法書』卷13に見える。

(山下敬起)

【No159】

蒹葭堂<sup>1</sup>法帖一卷 上元雷氏本

明雷宸甫<sup>2</sup>藏董其昌書石刻。宸甫之名無考。香光自跋云<sup>3</sup>。青溪雷宸甫得夏君甫<sup>4</sup>所刻予書石。築室而藏之。昔勝國時。崑山顧善夫<sup>5</sup>与趙吳興同世。即以吳興尺牘勒石。名為樂善堂帖<sup>6</sup>。宋曹之格宝晋<sup>7</sup>齋雖仍米襄陽之名。而米書特備。予謂宸甫藏石則可。伝搨則不可。恐世有鑑裁者。以為蒹葭堂主人。但宝燕石、誰為解嘲也。陳眉公題云。玄宰碑版照四裔。独宸甫所藏蒹葭堂帖最称粹白。視賈耘老所得於蘇長公者。不啻一斛夜光矣。前為縮臨王聖教。後書禪悦。与容台集稍有出入。末則以禪理喻書。推挹楊凝式。而薄趙吳興。晚年其論乃變。始蓋有与前人争勝之意。晚知書学詣力。各有所独到。不必是丹非素<sup>8</sup>。学問之事。所造愈深者心亦愈下。即如劉石庵論書。詆斥香光。後乃自謂僭踰而愧悔。董於趙猶是也。以禪喻書。王夢樓推闡其義。大暢玄風。夫書之理。未始不可与禪通。而強為比附。転或啓学人之誤解。無所裨益。存備一格可耳。摸勒頗精。搨用蟬翼法。饒有古意。今伝本不多見矣。

明の雷宸甫は董其昌（1555～1636）の書の石刻を蔵す。宸甫の名は考うる無し。香光（董其昌）の自跋に云う「青溪の雷宸甫 夏君甫の予の書の刻する所の石を得て、室を築きて之を蔵す。昔 勝国の時、崑山の顧善夫 趙吳興（孟頫 1254～1322）と世を同じくし、即ち吳興の尺牘を以て石に勒し、名づけて樂善堂帖と為す。宋の曾之格の宝晋齋は米襄陽（芾 1051～1107）の名に仍ると雖も、而れども米書 特に備わる。予謂えらく宸甫 石を蔵するは則ち可なり、搨を伝うるは則ち不可なり、恐らく世に鑑裁する者有り、以て蒹葭堂主人 但だ燕石を宝とすと為す。誰れか解嘲を為さんや。」と。陳眉公（繼儒 1558～1639）題云う「（董）玄宰の碑版は四裔を照らすも、独り宸甫の蔵する所の蒹葭堂帖は最も粹白と称す。賈耘老（収、烏程の人）の蘇長公（軾 1036～1101）より得る所の者に視ぶれば、ただ一斛の夜光のみならず。」と。前は縮臨の王聖教（集王聖教序）と為す。後に禪悦を書す。『容台集』（卷1所収）と稍や出入有り。末は則ち禪理を以て書を喻え、楊凝式（873～954）を推挹し、而して趙吳興を薄んず。晚年 其の論 乃ち変わる。始めは蓋し前人と勝を争うの意有り。晩は書学の詣力、各おの独り至る所あり、必ずしも丹を是として素を非とせざるを知る。学問の事は、造る所愈いよ深き者は心も亦た愈いよ下なり。即ち劉石庵（壻 1719～1804）の論書の如きは、香光を詆斥し、後 乃ち自ら謂う「僭踰と謂いて愧悔す。董の趙に於けるは猶お是のごときなり。」と。禪を以て書を喻うるは、王夢樓（文治 1730～1802）其の義を推闡し、大いに玄風を暢ぶ。夫れ書の理は、未だ始めより禪と通ずべからずんばあらず。強いて比附を為さば、転た或いは学人の誤解を啓き、裨益する所無し。一格を存備すれば可なるのみ。摸勒 頗る精し、搨するに蟬翼法を用い、饒かに古意有り。今 伝本多くは見ず。

【注】

- 1 蒹葭堂：未検。
- 2 雷宸甫：未検。
- 3 香光自跋云：『容台集』『画禪室隨筆』に見えない。
- 4 夏君甫：未検。
- 5 顧善夫：顧信（1279～1353）。善夫は字。号は樂善処士。崑山の人。杭州軍器同提挙。

- 6 樂善堂帖：元の延祐五年（1318）の刻。明の張寶の旧蔵の明拓で七巻があり、現在は中国国家図書館蔵。
- 7 曹之格宝晋齋：『叢帖目 2』所収。全10巻。曹之格は南康軍都昌（今の江西都昌）の人。
- 8 是丹非素：偏見があるの意。

（船田聖也）

【No160】

天香楼帖十二卷上虞王氏本

清王望霖<sup>1</sup>輯。初刻八巻。明五巻。清三巻。嘉慶元年至九年刻成。統刻二巻。又梁同書及成邸<sup>2</sup>各一卷<sup>3</sup>。道光十五年勒成。題首曰天香楼蔵帖。天香楼統刻。以及巻末年月皆隸書。望霖。字濟蒼。号石友。其自跋云。幼耽書法。見名人墨迹輒沈黙不置。不能購者則借以双鈎。第僻处鄉隅。自明至国朝僅得数十家。欲公同好。爰勒貞珉。帖於明清人書。選採精審。未有贗迹。帖中多濟蒼自跋。書体頗似梁山舟<sup>4</sup>。自能書者方能鑑書。俗子以賞鑑自命。雜収古人書迹。真偽不弁。自以為是。摹勒成帖。妄思伝名不朽。因而乖謬百出。如此者何可勝紀。濟蒼有鑑於此。其収書断自明代。即宋元亦不敢涉及。雖未免於狹隘。然視他帖之展巻晋唐。實無一非妄造者。高下何如。今以王氏所蔵墨迹与帖互勘。無大出入。知其摹勒亦極審慎。而非草率成之者。亦彙帖中之可觀也。

清の王望霖の輯。初刻は八巻、明は五巻、清は三巻、嘉慶元年（1796）より九年（1804）に至りて刻成る。統刻は二巻。又た梁同書及び成邸各一卷。道光十五年（1835）に勒成す。題首に曰う天香楼蔵帖、天香楼統刻より、以て巻末の年月に及ぶまで皆な隸書。望霖は、字は濟蒼、号は石友。其の自跋に云う「幼くして書法に耽り、名人の墨迹を見れば輒ち沈黙して置かず。購う能わざる者は則ち借りて双鈎す。第だ郷隅に僻处したれば、明より国朝に至るまで僅かに数十家を得るのみ、同好に公にせんと欲し、爰に貞珉に勒す。」と。帖は明清の人の書に於て、選採精審にして、未だ贗迹有らず。帖中に濟蒼の自跋多し、書体は頗る梁山舟に似る。自ら書を能くする者にして方に能く書を鑑す。俗子は賞鑑を以て自命し、古人の書迹を雜収し、真偽弁せず、自ら以て是と為し、摹勒して帖を成し、妄りに名を不朽に伝えんことを思う。因りて乖謬百出す。此の如き者は何ぞ紀するに勝うべけん。濟蒼は此に鑑あり。其の収書は明代より断じ、即ち宋元も亦た敢えて涉及せず。未だ狹隘を免かれずと雖も、然れども他帖の展巻は晋唐なるも、實に一の妄造に非ざる者無き者に視て、高下は何如。今王氏の所蔵の墨迹を以て帖と互勘すれば、大の出入無し。其の摹勒も亦た審慎を極めて、草率に之を成す者に非ざるを知る。亦た彙帖中の観るべき者なり。

[注]

- 1 王望霖：1774～1836。浙江省上虞梁湖の人。
- 2 成邸：成親王（1752～1824）。乾隆帝の第11子、姓は愛新覺羅、名は永理。字は鏡泉、号は少雁、即齋、怡晋齋は齋号。
- 3 梁同書及成邸各一卷：提要は劉墉に触れないが、上虞博物館に現存する『天香楼帖』12巻では、怡晋齋帖1巻、劉梁合璧1巻であり、劉墉の「漁莊雪霽等詩十首」も含まれる。
- 4 梁同書：1723～1815。字は元穎、号は山舟ほか、浙江省錢塘の人。翁方綱、王文治、劉墉とともに帖学の四大家と称された。専帖に『頻羅庵論書』『弁香楼帖』ほかがある。

（郭 梓瑩）

【No161】

弁志書塾所見帖<sup>1</sup>正統刻 常州暨陽書院本

清李兆洛<sup>2</sup>輯。無巻数。前列趙南星至朱国禎十一人為東林<sup>3</sup>翰墨。有徐倬。徐元正。丁澎。黄宗羲跋。又繆昌期至侯岐曾十四人。附侯氏書五家<sup>4</sup>。跋云。明時諸家随所見入石。故不能依先後次第。始道光六年春。断手於十四

年秋。兆洛識。統刻自鄒元標至徐石騏十四人<sup>5</sup>。与前刻重鄒南阜。楊大洪。繆昌期。侯豫瞻四人。卷首題云。古來稱工書者率瑰瑋人。魏晉則鍾王。唐宋則顏柳蘇黃是也。自以書為芸。而其途遂分。然端人傑士之書。要無不工。蓋志氣流露自不可掩。此本末之弁也。余多見宋元以下忠義之迹。次第借摹以永其傳。附矜式之意。且為養正之助。李氏此刻。用意与人帖<sup>6</sup>相同。惟申耆學問淹博。所採諸賢書無偽本。不似鉄冶亭所刻真贋混淆也。弁志書塾即暨陽書院山長所居之齋。申耆多与學者往来。書家鄧完白。包慎伯。至常。均主之。刻帖出自通人。精雅可觀。非其他俗本所及。惟其間皆明賢書。流傳尚多。以故不為世重耳。

清的李兆洛の輯。卷数無し。前に趙南星より朱國禎に至る十一人を列し東林翰墨と為す、徐倬、徐元正、丁澎、黄宗羲の跋有り。又た繆昌期より侯岐曾に至る十四人に侯氏の書の五家を附す。跋に云う、「明時の諸家は見る所に隨いて入石す、故に先後の次第に依る能わず。道光六年（1826）の春に始め、十四年（1834）の秋に断手す。兆洛識す。」と。統刻は鄒元標より徐石騏に至る十四人、前刻と重なるは鄒南阜、楊大洪、繆昌期、侯豫瞻の四人。卷首の題に云う、「古來書を工にすと稱する者は率ね瑰瑋の人、魏晉は則ち鍾（繇）王（羲之）、唐宋は則ち顏（真卿）柳（公權）蘇（軾）黄（庭堅）是れなり。書を以て芸と為してより、其の途遂に分かる。然れども端人傑士の書、要ず工ならざるは無し。蓋し志氣の流露は自ら掩うべからず、此れは本末の弁なり。余多く宋元以下の忠義の迹を見る、次第に借摹して以て其の伝を永くし、矜式の意を附して、且つ養正の助けと為す。」と。李氏の此の刻は、用意 人帖と相同じ。惟だ申耆の学問は淹博、採る所の諸賢の書に偽本無きは、鉄冶亭（保）刻する所の真贋混淆なるに似ざるなり。弁志書塾は即ち暨陽書院の山長の居る所の齋、申耆は多く学者と往来す、書家の鄧完白（石如）、包慎伯（世臣）、常（常州）に至りては、均しく之に主（やど）る。刻帖は通人より出で、精雅観るべし。其の他の俗本の及ぶ所に非ず。惟だ其の間皆な明賢な書、流傳尚お多し。以ての故に世に重んぜられざるのみ。

[注]

- 1 弁志書塾所見帖：集帖。4卷、統刻1卷、補刻1卷。孔憲之の模勒。
- 2 李兆洛：1769～1841。字は申耆、号は養一老人。江蘇省武進の人。
- 3 東林：東林党。明末の江南の士大夫を中心とした政治集団・学派。
- 4 侯氏書五家：岷曾与老伯書、元沅与九老書、元洵与九初書、元演与九初書、元涵与翼老書の五書札。
- 5 至徐石騏十四人：『叢帖目 2』によれば、鄒元標から徐石騏、瞿式耜の17名にのぼる。
- 6 人帖：嘉慶11年（1806）、鉄保の撰集、長沙の周鏗は帖目と小伝を書く。

（張 宇寧）

【No162】

述德堂小楷集刻四卷<sup>1</sup> 常熟錢氏本

清錢泳輯。泳。字梅溪。所臨摹小唐碑已著録<sup>2</sup>。此所摹晉唐及宋元人小楷。首冊洛神十三行及明清人題跋。金剛般若波羅密經。十三行乃宋搨致佳之本。惜梅溪双鈎。未免鈍滯之歎。不能与玄奘<sup>3</sup>諸刻相匹。在梅溪摹帖中却是最精之作。由其原迹超妙。異於庸刻。故王楊夫謂。非玉版以下所可同論。金剛經体勢平近。不過明代人書。其視唐經生之筆筆堅實猶遠遜。今刻之唐人書以前。則鑑者之過也。二冊長壽王品迦絺那經<sup>4</sup>。筆力沈著。在唐經生書中為別一体格。書品在妙法蓮華經之上。蓮花經結字頗適緊。而乏疏宕之致。此類唐人写經皆非優越之品。刻此為後学法。未免過於珍視。此等書固無足為芸林輕重也。三冊米海岳書千文。刻者多矣<sup>5</sup>。然絕非米筆。米蹟惟王煙堂刻者為真<sup>6</sup>。此書雖經吳魯庵<sup>7</sup>。王弇州<sup>8</sup>。王煙客<sup>9</sup>。宋既庭<sup>10</sup>。姜西溟<sup>11</sup>諸賢題贊。其去米法甚遠。雖有縱逸之致。於海岳無垂不縮。無往不取<sup>12</sup>之妙何曾夢見。以為米書真蹟。皆非能知海岳者也。四卷歸去來辭並序。松雪書。有淡雅之致。元阿沙不花<sup>13</sup>等賀表。書蹟未為研妙。尚是元人真筆。句曲外史楷書二詩。雅有逸致。宋仲温楷法實從之出。此刻為錢氏精意之作。此本乃其初搨。前後印記皆梅溪所自鈐印。而題籤亦其自書。所惜選帖未精。

若尽如十三行。張貞居詩之類。其可宝愛当何如耶。

清の錢泳（1759～1844）の輯。泳は、字は梅溪。臨摹する所の小唐の碑は已に著録す。此に摹する所は晋唐及び宋元人の小楷。首冊は洛神（賦）十三行及び明清人の題跋。金剛般若波羅密（蜜）經。十三行は乃ち宋搨の致佳の本なるも、惜むらくは梅溪の双鉤なれば、未だ鈍滯の処を免れず、玄宴齋の諸刻と相匹する能わず。梅溪の摹帖中に在りては却て是れ最精の作。其の原迹の超妙なるに由りて、庸刻に異なる。故に王惕夫（芑孫 1755～1817）謂う「玉版以下の所同じく論ずべき所に非ず」と。金剛經は体勢平近、明代の人の書に過ぎず、其の唐の經生の筆筆の堅実なるに視ぶれば猶お遠く遜る。今之を唐人の書以前に刻するは、則ち鑑る者の過ちなり。二冊は長寿王品迦絺那經、筆力は沈著、唐の經生の書の中に在りては別の一体格と為し、書品は妙法蓮華經の上に在り。蓮花經は結字頗る適緊にして、疏宕の致に乏し。此の類の唐人の写經は皆な優越の品に非ず。此を刻して後学の法と為すは、未だ珍視に過ぐるを免れず。此等の書は固より芸林の為に軽重するに足る無し。三冊は米海岳（芾）の書の千文、刻者多きも、然れども絶えて米筆に非ず。米蹟は惟だ玉煙堂（帖）の刻する者を真と為す。此の書は吳匏庵、王弇州、王煙客、宋既庭、姜西溟の諸賢の題賛を經と雖も、其の米法を去るは甚だ遠し。縦逸の致有りとは雖も、海岳の垂るるとして縮まらざるは無く、往くとして収まらざるは無きの妙に於ては何ぞ曾て夢見ん。以て米書の真蹟と為すは、皆な能く海岳を知る者に非ず。四卷の帰去來辭並びに序は、松雪の書。淡雅の致有り。元の阿沙不花等の賀表は、書蹟は未だ研妙と為さざるも、尚お是れ元人の真筆。句曲外史（張雨 1283～1350）の楷書二詩は、雅にして逸致有り、宋仲温（克 1327～87）の楷法は實に之より出づ。此の刻は錢氏の精意の作と為す。此の本は乃ち其の初搨、前後の印記は皆な梅溪の自ら鈴印する所にして、而して題籤も亦た其の自書。惜しむ所は選帖未だ精ならず。若し尽く十三行、張貞居の詩の類の如くんば、其れ宝愛すべきこと当に何如なるべきや。

〔注〕

- 1 述德堂小楷集刻四卷：錢泳『履園叢話』には見えない。
- 2 所臨摹小唐碑已著録：『続修四庫全書』No17「唐碑縮本四十種」（『説帖』）を指す。
- 3 玄宴齋：No.126「齋谷米董帖二卷」、No.212「浄雲枝帖六卷」、『続修四庫全書』No.7「怪雪堂法書五卷」（『説帖』）参照。
- 4 長寿王品迦絺那經：中阿含經第88卷。八齋戒について説かれている。
- 5 刻者多矣：「小楷千字文」「草書千字文」などがあるが刻者は不明。
- 6 米蹟惟玉煙堂刻者為真：『玉煙堂法帖』卷23所収「米芾千字文（並表）」に記載。
- 7 吳匏庵：吳寬（1435～1504）。字は原博、江蘇省長洲の人。官は礼部尚書。
- 8 王弇州：王世貞（1526～90）。字は元美、号は弇州山人。江蘇省太倉の人。官は刑部尚書。
- 9 王煙客：王時敏（1592～1680）。煙客は号、婁東江蘇省太倉の人。明末清初の文人画壇の中心。清初六家の一人。
- 10 宋既庭：宋実穎（1621～1705）。既庭は字、号は湘尹。江蘇長洲の人。
- 11 姜西溟：姜宸英（1628～99）。字は西溟、号は湛園、又は葦間、浙江慈溪の人。明史の編纂に関わり、朱彝尊・嚴繩孫と三布衣と称された。書は楷書をもって知られ、画は山水を能くした。
- 12 無垂不縮。無往不収：運筆の基本原則。姜夔『続書譜』に見える。翟耆が米芾に書法を問うた時の答え。
- 13 阿沙不花：1263～1309。元の宰相。康里（カングリ）族出身。諡は忠烈。元朝の第3代皇帝武宗擁立に活躍。

（澤岡雪子）

〔No.163〕

述德堂枕中帖<sup>1</sup> 常熟錢氏本

清錢泳書。其子曰祥<sup>2</sup>彙刻為四卷。泳字梅溪。以工書及摹勒擅名嘉道間。所刻帖如劉文清之清愛堂<sup>3</sup>。成邸之詒晉齋<sup>4</sup>。均出其手<sup>5</sup>。其他手自摹鑄之帖。不可以數計。此刻皆小品。卷一。臨右軍樂毅論 蘭亭序 快雪時晴帖 大道帖 霜寒表 四月帖 大令書訣表 昨遂不奉別帖 冠軍帖。卷二。臨虞永興破邪論 褚河南樂志論 帝京篇 鍾紹京維摩經 顏魯公巨川告 王居士塲塲銘。卷三。臨蔡君謨茶錄 蔡君謨詩帖 蘇東坡橘頌 蘇東坡詩帖 黃山谷札 黃山谷詩帖 米元章詩帖。卷四。臨松雪道德經 洛神賦 過秦論 柯丹邱上京宮詞 董香光樂志論。道光二年春摹勒上石。有錢氏寫經樓金石圖書印<sup>6</sup>。姚元之題云<sup>7</sup>。梅溪於古帖無所不臨。輒得其精妙。於稷帖尤致力。至百數十本。大小隨意出之。令人神往。此幅縮小。而全神團結。如舞劍者光芒逼人眉宇。時同寓近光樓<sup>8</sup>中。退直得徧觀所臨。於此更心慕焉。夫梅溪之書。不能盡繩以古法。要其工力既深。下筆圜折自如。其詣有非尋常所能到者。曰祥。字益生。書有乃翁風致。自言每見片紙。必什襲珍藏。積久成冊。謹為刻石<sup>9</sup>。是能不愧家學者矣。

清の錢泳（1759～1844）の書。其の子の曰祥 彙刻し四卷と為す。泳は字は梅溪。書及び摹勒に工なるを以て名を嘉（慶 1796～1820）道（光 1821～50）間に擅にす。刻する所の帖の劉文清（壩 1720～1804）の清愛堂、成邸（親王 1752～1824）の詒晉齋の如きは、均しく其の手に出づ。其の他の手自ら摹鑄するの帖は、数を以て計るべからず。此の刻は皆な小品。卷一は、右軍（王羲之）の樂毅論 蘭亭序 快雪時晴帖 大道帖 霜寒表 四月帖 大令（王獻之）の書訣表 昨遂不奉別帖 冠軍帖を臨す。卷二は、虞永興（世南）の破邪論 褚河南（遂良）の樂志論 帝京篇 鍾紹京の維摩經 顏魯公（真卿）の巨川告 王居士塲塲銘を臨す。卷三は、蔡君謨（襄）の茶錄 蔡君謨の詩帖 蘇東坡（軾）の橘頌 蘇東坡の詩帖 黃山谷（庭堅）の札 黃山谷の詩帖 米元章（芾）の詩帖を臨す。卷四は、松雪（趙孟頫）の道德經 洛神賦 過秦論 柯丹邱（九思）の上京宮詞 董香光（其昌）の樂志論を臨す。道光二年（1822）春 摹勒上石す。「錢氏寫經樓金石圖書」の印有り。姚元之 題して云う。「梅溪は古帖に於て臨せざる所無く、輒ち其の精妙を得。稷帖に於て尤も力を致し、百數十本に至る。大小 随意に 之を出だし、人の神をして往かしむ。此の幅は縮小、而れども全神 團結し、劍を舞う者の光芒の如く人の眉宇に逼る。時に同に近光樓中に寓す、退直して徧なく臨する所を觀るを得、此に於て更に心慕す。」と。夫れ梅溪の書は、尽くは繩するに古法を以てする能わず、要らず其の工力 既に深く、下筆は圜折自如。其の詣 尋常の能く到る所に非ざる者有り。曰祥は字は益生。書は乃翁の風致有り。自ら言う「片紙を見る毎に、必ず什襲珍藏す。積むこと久しくして冊を成す。謹みて為に石に刻す。」と。是れ能く家學に愧じざる者なり。

[注]

- 1 述德堂枕中帖：【叢帖目 4】述德堂枕中帖 4 卷 参照。
- 2 曰祥：未検。
- 3 清愛堂：清愛堂石刻は劉壩の書27種を、嘉慶10年に勅命で刻入したもの。5 卷。劉鏞（?～1821。字は信芳、号は佩循。劉壩の甥）の摹勒。完成時については、錢泳【履園叢話】卷9 碑帖「家刻」に「（嘉慶）十一年夏五月刻成進上」とある。張伯英【說帖】（【統修四庫提要】第18卷313頁）清愛堂石刻6 卷には「錢梅谷（泳）鈎勒古今人意 [書] 往往參以己意。此刻誠工緻。以校墨迹則稍鈍。亦不能無遺憾云。」とあるほか、【說帖】（同312頁）詒晉齋法書16卷、No144劉文清墨刻3 卷にも関連記事がある。
- 4 成邸之詒晉齋：張伯英【說帖】（【統修四庫提要】第18卷301頁）話雨樓帖4 卷に「錢梅溪曾刻詒晉齋帖大小二種」とある。【履園叢話】卷9 碑帖「家刻」には「嘉慶四年己未（1799）、遊京師、鈎刻成親王法書為詒晉齋四卷。十年乙丑（1805）、復至京師、又增益二集 三集 四集、共十六卷、又得成王書一鱗片爪、集成小冊、為詒晉齋巾箱帖四卷。」とあるほか、同書「本朝帖」に「嘉慶九年（1804）、諭內閣命成親王刻詒晉齋石刻四卷。十年（1805）……又成親王自刻所藏晉唐宋元旧蹟為詒晉齋摸古帖十卷。」とある。
- 5 均出其手：張伯英【說帖】（【統修四庫提要】第18卷312頁）詒晉齋法書16卷に「錢以鈎勒擅名。其摹他人書有時參用己意。此与劉石庵之清愛堂帖同出其手、而所刻清勁勝於劉帖、成書平成、筆姿皆顯露、較易摹耳。」とある。

- 6 錢氏写経楼金石図書印：江西美術出版社『中国鑑藏家印鑑大全』、上海書店出版社『中国蔵書家印鑑』に見えない。
- 7 姚元之題云：1773～1852。字は伯昂、号は鷹青、竹葉亭主。安徽省桐城の人。嘉慶10年（1805）の進士で、道光18年（1838）には都察院左御史に至った。インターネット上に掲載される述徳堂枕中帖の当該跋は、落款を入れて11行から成る。「樸溪〔先生〕於古帖無所不臨。輒得其精妙。於稷帖尤〔常臨之。蓋已〕百數十本。大小随意出之。〔每〕令人神往〔知其得於右軍者已深矣〕。此幅縮〔本〕。而全神團結。〔直〕如舞劍者光芒逼人眉宇〔也〕。時同万近光楼中、退直得徧觀所臨。於此更心慕焉。〔嘉慶己巳（14年 1809）長夏姚元之跋。〕」〔 〕内は法帖提要では省略あるいは言い換えられている部分。
- 8 時同寓近光楼：『履園叢話』巻20園林「澄懷園 京師」に「澄懷園在円明園東南隅、毎年夏月、車駕幸園、尚書房暨南書房諸臣侍直之所。……余嘗於嘉慶14年（1809）七月、相国英公有筆墨事見囑、小寓于此。時公為戸部侍郎兼副提督、適姚伯昂（元之）、席子遠兩編修新人南書房、同在近光楼盤桓者四十余日。」とあるほか、類似の記事が巻9 耆旧「謙士侍郎」、巻12 芸能「十番」、巻23 雜記上「布衣可貴」に見える。
- 9 自言每見片紙必什襲珍蔵積久成冊謹為刻石：『叢帖目 4』述徳堂枕中帖 4巻には、「家嚴素工隸古、而於晉唐宋元明人書帖尤銳精臨仿、為世所稱。日祥每見片紙、必什襲珍蔵。積之既久、遂為小冊、謹為刻石置之述徳堂中……。」とあり、文に若干の異同がある。

（池田絵理香）

【No164】

醉經閣分書彙刻八巻<sup>1</sup> 石門蔡氏本

清蔡錫恭<sup>2</sup>輯。錫恭。字子寿。又字少峰。為蔡載福<sup>3</sup>鹿賓之從子。鹿賓曾刻国朝画家書四巻<sup>4</sup>。少峰則刻分書八巻。自清初遺老訖嘉道諸人。凡一百二十家。成於咸豐三年秋九月。自言選取皆從真墨。非審定精確。不敢漫登。蓋欲存一代真迹。伝信後人。不得不矜重。摹勒者海塩張受之<sup>5</sup>。胡衣谷<sup>6</sup>。亦當時名手。而為之審定者張叔未也。二百年中以分書名家。略具於是。惟同時鄧完白書未曾採入。蓋刻此者浙人。於浙中先輩書迹。所採最多。道咸而後。工分書者不乏其人。惜無統此刻者。補先輩之欠遺。甄後賢之墨妙。俾清代分書。備於二刻。豈非芸林珍玩哉。時移世易。風雅之事。既無人為之提倡。而有力者亦不復注意於此。使人於一物之微。追想昔日太平之盛。光緒間銅山葛繩鑿<sup>7</sup>字革沼。工八分。作蠅頭細字。不失漢法。臨川桂履真<sup>8</sup>守徐。極稱賞之。桂亦善分書者。学人精於一芸。老死牖下。姓名不出里巷者何可勝道。閱此刻重有感矣。

清の蔡錫恭の輯。錫恭、字は子寿。又た字は少峰。蔡載福 鹿賓の從子為り。鹿賓は曾て国朝画家書四巻を刻す。少峰は則ち分書八巻を刻す。清初の遺老より嘉道（1796～1850）の諸人に訖るまで、凡そ一百二十家。咸豐三年（1853）秋九月に成る。自ら言う「選取は皆な真墨に從る。」と。審定 精確に非ざれども、敢えて漫りに登さず。蓋し一代の真迹を存し、信を後人に伝えんと欲す。矜重せざるを得ず。摹勒者は海塩の張受之、胡衣谷。亦た當時の名手。而して之が為に審定する者は張叔未（廷濟 1768～1848）と為すなり。二百年中 分書を以て家を名せらるるものは、略ぼ是に具わる。惟だ同時の鄧完白（石如 1743～1805）の書は未だ曾て採入せず。蓋し此れを刻する者は浙人なれば、浙中の先輩の書迹に於ては、採る所最も多し。道咸（1821～61）而後、分書に工なる者は其の人に乏しからざれども、惜しむらくは此の刻を続ける者の、先輩の欠遺を補い、後賢の墨妙を甄る無し。清代の分書をして、二刻に備わらしめば、豈に芸林の珍玩に非ずや。時移れば世易わり、風雅の事、既に人の之が為に提倡する無く。而して力有る者も亦た復た此に注意せず。人をして一物の微に於て、昔日の太平の盛を追想せしむ。光緒の間（1875～1908）銅山の葛繩鑿 字は革沼。八分に工みにして、蠅頭の細字を作り、漢法を失せず。臨川の桂履真 徐に守たりしとき、極めて之を稱賞す。桂も亦た分書を善くする者。学人 一芸に精しきも、牖下に老死し、姓名 里巷に出でざる者 何ぞ道に勝うべけんや。此の刻を閱すれば重ねて感有り。

[注]

- 1 醉經閣分書彙刻八卷：『叢帖目 3』に所収。
- 2 蔡錫恭：光緒 5 年『嘉興府志』卷60「石門文苑」に「蔡錫恭增貢生。吳江縣丞平素工六書。蒐輯晉唐以來石刻數百種、詳加攷核、為醉經閣金石考十二卷。待刊。」とある。
- 3 蔡載福：生歿不詳。浙江省石門の人。光緒 5 年『嘉興府志』卷60「石門芸術」に「蔡載福字鹿賓。瀟灑出塵。工花鳥。集國初迄今諸画家書、摹勒上石、并刻方蘭坻奚鐵生兩家墨跡。于後好古。之勤一時推重。」とある。
- 4 國朝画家書四卷：『叢帖目 3』、『説帖』（『統修四庫提要』第18卷285頁）所収。
- 5 張受之：張辛（1811～48）。受之は字、浙江省嘉興の人。篆刻をよくし、特に刻石に優れた。張廷済に金石学を学んだ。
- 6 胡衣谷：胡有声（生歿年不詳）。衣谷は字。刻石の技に優れ、古人の名跡を模刻した。
- 7 葛繩鑒：民国15年『銅山県志』卷65「人物伝」に「葛繩鑒字品藻。諸生。書法初模歐陽詢、体秀而腴。進窺漢人分隸。又得鄭燮硯農墨跡、酷愛之。由是馳思物表、落筆若不經意、而高氣秀韻自与古合。時臨川桂中行守徐州、工隸書。独目繩鑒為伝人。性愛菊、亦号鞠農云。」とある。
- 8 桂履真：桂中行。？～1895。履真是字。No154を参照。

(西原 歩)

【No165】

倦舫法帖八卷<sup>1</sup> 臨海洪氏本

清洪頤煊<sup>2</sup>及子瞻墉同輯。頤煊。字筠軒。深於經学。著述宏富。瞻墉。字容甫。道光時官於粵東<sup>3</sup>。以端州石摹刻此帖。明清人書各四卷。卷首各題倦舫法帖四篆字。下為洪頤煊名字印。卷尾三印。一倦舫。一子孫永宝<sup>4</sup>。一臨海洪瞻墉字容甫別号小筠。八冊後篆書題云。道光五年歲次乙酉冬十月臨海洪氏以家藏本摹勒上石。首冊有木刻総目。第一冊李応楨至王穀祥十一人。第二冊文彭至黄之璧十二人。第三冊王世懋至黄汝亨十三人。第四冊董其昌至劉宗周十二人。計明代四十八人。第五冊吳偉業至查士標十六人。第六冊李天馥至王澐十二人。第七冊黄機至周之麟十二人。第八冊彭孫通至尤侗十二人。計清代五十二人。共為一百家。選択精慎不苟。不曾雜有偽帖。刻帖本学人之事。庸夫俗子恃其多金。広収贗書。上及漢晋。妄思刻帖伝世。而自亦得垂名不朽。如姚氏之唐宋八家<sup>5</sup>。孫氏之聽雨樓<sup>6</sup>等。徒使識者望而生厭。雖摹搨精美。卷帙豊富。直土直耳。是刻不出明清兩代。而百家之書皆真且精。学者之製。自遠非俗子所能逮。且端州佳石。足伝永久。亦近代叢帖之美者矣。

清の洪頤煊及び子の瞻墉の同輯。頤煊は、字は筠軒、經学に深じ、著述は宏富。瞻墉（生歿年不詳。号は少筠）は、字は容甫、道光の時粵東に官し、端州石を以て此の帖を摹刻す。明清の人の書は各四卷。卷首に各おの「倦舫法帖」の四篆字を題す、下は洪頤煊の名字の印と為す、卷尾は三印、一は「倦舫」、一は「子孫永宝」、一は「臨海洪瞻墉字容甫別号小筠」。八冊の後の篆書に題に云う「道光五年（1825）歳は乙酉に次の冬十月臨海の洪氏家藏本を以て摹勒して上石す。」と。首冊に木刻の総目有り。第一冊は李応楨より王穀祥に至る十一人。第二冊は文彭より黄之璧に至る十二人。第三冊は王世懋より黄汝亨に至る十三人。第四冊は董其昌より劉宗周に至る十二人。計明代は四十八人。第五冊は吳偉業より查士標に至る十六人。第六冊は李天馥より王澐に至る十二人。第七冊は黄機より周之麟に至る十二人。第八冊は彭孫通より尤侗に至る十二人。計清代は五十二人。共に一百家為り。選択は精慎にして苟にせず、曾て偽帖を雜有せず。刻帖は本は学人の事、庸夫俗子は其の多金を好み、広く贗書を収め、上は漢晋に及び、妄りに帖を刻して世に伝え、而して自らも亦た名を不朽に垂るるを得るを思う。姚氏の唐宋八家孫氏の聽雨樓等の如きは、徒だ識者をして望んで厭を生ぜしむ、摹搨は精美、卷帙は豊富と雖も、直だ土直なるのみ。是の刻は明清兩代を出でず、而れども百家の書は皆な真にして且つ精、学者の製なれば、自から遠く俗子の能く逮ぶ所に非ず。且つ端州の佳石なれば、永久に伝うるに足る、亦た近代の叢帖

の美なる者なり。

[注]

- 1 倦舫法帖八卷：『叢帖目 2』に所収。
- 2 洪頤煊：1765～1837。またの字は旌賢、晩号は倦舫老人。浙江臨海の人。官は羅定州同に至った。著に『筠軒詩鈔』などがある。
- 3 道光時官於粵東：未詳。(道光2年『廣東通志』職官表には見えない。)
- 4 子孫永宝：ハーバート大学蔵本に見える印記(刻)は「子孫永保」(白文)である。
- 5 姚氏之唐宋八家：『唐宋八大家法書』12巻、姚学経の撰集。
- 6 孫氏之聽雨樓：『聽雨樓法帖』4巻、孫阜昌の撰集。

(鄭 緯)

【No166】

書画記一卷<sup>1</sup> 抄本

明吳其貞<sup>2</sup>著。其貞字公一。徽郡人。所記書画。以得見之前後為次。不限時代。以宋元遺迹為多。晋唐亦間有之。先原迹之形状。加以評語。次及所見之人与地。蓋隨筆記錄。為例亦不一也。作書画記者甚多。而可觀者特少。其人不能賞鑑。則真偽混淆。未足為捩。近人收取書画。以曾見著録為憑。豈知著録正亦有未足足憑者乎。若吳公一所記。著語不多。大致簡当。其間宋元真迹。近日已多不及見。其論獅子林図云<sup>3</sup>。倪<sup>4</sup>趙<sup>5</sup>兩家。画法不同。此幅墨氣淋漓。絶是善長本色。無雲林一点一画。雲林題<sup>6</sup>云予与善長商榷作獅子林図。深得荆<sup>7</sup>関<sup>8</sup>遺意。非王蒙<sup>9</sup>所能夢見。是其讚美趙画未言合作。而名流題跋皆謂。倪趙合筆。或竟稱為倪作。殊屬謬誤。又因論画而旁及他事。亦有裨於旧聞。年月於崇禎後只書干支。与同觀画之人。有鄒臣虎<sup>10</sup>、莊澹庵<sup>11</sup>、王玄照<sup>12</sup>。則為明季遺民。可知又明季收藏家。他書中所不曾及者。往往因此其姓氏。尤為可珍。惟記東坡昆陽城賦<sup>13</sup>云。書法遒勁。結構茂密。直入魯公之室。多載於賞鑑家記錄。是以膾炙人口。此賦坡公偽書。吳亦稱之。殆鑑別遇失。而震驚於名流之題跋歟。卷中有數処不相銜接。蓋非完帙。有詩龕藏書印記<sup>14</sup>。是孤本之僅存者矣。

明の吳其貞の著。其貞は字は公一。徽郡(安徽徽州)の人。記す所の書画は、見るを得るの前後を以て次と為し、時代を限らず。宋元の遺迹を以て多しと為すも、晋唐も亦た間ま之有り。原迹の形状を先にして、加うるに評語を以てし、次に見る所の人と地とに及ぶ。蓋し隨筆の記録なれば、例を為すも亦た一ならざるなり。書画記を作る者甚だ多けれども、観るべき者は特に少なし。其の人賞鑑に精じからざれば、則ち真偽混淆し、未だ捩と為すに足らず。近人の書画を收取し、曾て著録せらるるを以て憑と為す。豈に著録の正にして亦た未だ尽くは憑むに足らざること有るを知らんや。吳公一の記す所の若きは、著語多からずして、大致 簡当。其の間の宋元の真迹は、近日已に多くは見るに及ばず。其の獅子林図を論じて云う「倪趙兩家の、画法は同じからずして、此の幅の墨氣淋漓たること、絶だ是れ善長の本色、雲林の一点一画無し。雲林の題に云う【予と善長と商榷して獅子林図を作るは、深く荆関の遺意を得。王蒙の能く夢見する所に非ず。】と。是れ其の趙画を讚美して未だ合作と言わざれば、名流の題跋は皆な倪と趙との合筆と謂う。或るは竟に稱して倪の作と為す。殊に謬誤に属す。」と。又た論画に因らば、旁ら他事に及び、亦た旧聞に裨うこと有り。年月は崇禎(1628～44)の後に於て只だ干支を書くのみ。与に同じく画を観るの人に鄒臣虎、莊澹庵、王玄照有り、則ち明季の遺民と為す。又た明季の收藏家の、他書中の曾て及ばざる所の者、往往にして此に因りて其の姓氏を知るは、尤も珍しかるべしと為すを知るべし。惟だ東坡(蘇軾)の昆陽城賦に記して云う「書法は遒勁、結構は茂密、直ちに魯公の室に入る。多く賞鑑家の記録に載せらる。是を以て人口に膾炙す。」と。此の賦は坡の偽書にして、吳亦た之を稱うるは、殆ど鑑別を遇たま失し、名流の題跋に震驚するか。卷中 數処の相い銜接せざること有り。蓋し完帙に非ず。詩龕藏書印記有り。是れ孤本の僅かに存する者。



[注]

- 1 書画記一卷：『四庫全書』に見える呉其貞著の抄本『書画記』は巻6までである。
- 2 呉其貞：生歿年不詳。号は寄谷。清初の古画商人で鑑別に精しかったとされる。
- 3 論獅子林図云：『書画記』巻3に「倪雲林趙善長合作獅子林図紙画一卷」が見え、その中に当該文が見える。
- 4 倪：倪瓚（1306～74）。字は元鎮、号は雲林ほかがある。また、姓名を改め奚玄朗あるいは玄映と名乗る。
- 5 趙：趙元あるいは趙原（？～1372）。字は善長。号は丹林。山東の人。
- 6 雲林題：『書画記』巻3に見える当該文には「癸丑年（1373）十二月二十四日」の記述がある。
- 7 荆：荆浩（生歿年不詳）。後梁の人。字は浩然。河南あるいは河内の人。書法を柳公権に学び、山水画を能くした。
- 8 関：関仝または関童（生歿年不詳）。907～60の間にいたとされる。長安の人。山水画を最初荆浩に学んだ。
- 9 王蒙：1308～85。字は叔明、号は黄鶴山樵、黄鶴樵者、香光居士。呉興の人。趙孟頫の外孫で画法は趙に傾倒した。
- 10 鄒臣虎：鄒之麟（生歿年不詳）。臣虎は字、号は衣白、逸老、味庵、江蘇武進の人。万曆38年（1610）の進士で弘光（1644～45）の時都憲に至った。黄公望と王蒙の山水法を学んだ。
- 11 莊澹庵：莊岡生（1627～79）。字は王驄、澹庵は号、江蘇武進の人。順治4年（1647）の進士。右庶子兼侍読に至った。詩、古文辞に工みで書画を能くした。著に『宝書堂印型』ほかがある。
- 12 王玄照：王鑑（1598～1677）。玄照は字、号は染香庵主、湘碧、江蘇太倉の人。崇禎6年（1633）の挙人。同8年（1635）隠官兼州知府に至るも、同10年（1637）罷官された。収蔵に富み自らも画を能くした。著に『染香庵画跋』ほかがある。
- 13 東坡昆陽城賦：『書画記』巻1に当該項目が見え、「……此卷古今賞鑑者多載于記録中故膾炙人口。後有数題識失載其名。」とあり若干の異同がある。
- 14 詩龕藏書印記：上海書店出版社『中国藏書家印鑑』中の法式善の印に同文のものが見える。法式善（1752～1813）は、字は開文、号は時帆、梧門、陶廬、小西涯居士。蒙古族正黄旗の人で姓は伍堯氏。原名は運昌。詩龕は室号。乾隆45年（1780）の進士で官は侍読に至った。文学家、藏書家。『四庫全書』の編纂に関わった。

（安藤喜紀）